を超えたる初地の功德を、彼れの第三劫を超えたる佛果の功德に擬して釋するを以て也。次の華嚴亦之れに准じて、賢首の釋意に依らざることを知るべし。

○又此菩薩能於畢竟淨心中普集會十方法界諸佛菩薩亦自能普詣十方供養諸善知識詢求正法唯獨自明了諸天世人莫能知由此因緣復名秘密

後に華嚴に准じて釋す。即華嚴會場の善財童子次第に五十三の知識を詢求するに當る。疏の上の文云く、譬如彌勒開樓閣內善財此中見無量不思議事難以言宣但入者自知耳と。所擬の經文は晉譯華嚴第四十六入法界品にあり。探玄記第十八に廣釋す。能於畢竟淨心中等とは一切卽一なり。亦自能普等とは一卽一切也。探玄記第一一多相融不同門を釋して云く、舒已遍入一切法界中卽攝一切令入己內舒攝同時既無障碍是故鎔融と、以て知るべし。若し

能擬の密敎に約すれば疏第七云く、此瑜伽者能不起于座悉至如是諸佛會中亦能次第詢求諸善知識故云初地菩薩化滿百佛國と。問若し今疏の所擬の法花は天台の釋成に約するに非ずと云はば、何が故に寶鑰第八住心の下に無畏三藏說と標して、今の疏の文を引て大隋國淸寺智者禪師依此門得法華三昧と第八住心を證し給ふ乎。答無畏三藏は補處の菩薩の能不知に付て秘密と名くと雖、宗家は所不知の理秘密に轉用して、第八住心を證誠し給ふなり。問花嚴の事は善財童子にして解行位に在るを以て擬准して初地を證すべし、法花は本地身にして分眞に非ず、故に所擬となるべからず。又華嚴の例は舍利弗等を以て能不知とすれば、出過二乘に擬することを得べし。法華は能不知の人補處の菩薩なり、何ぞ准ずることを得ん乎。答法華の例は能不知の事を擬して所知の分全に拘はらざる故に初難なし、又能不知の人に彌勒

を擧ぐるは、其の位高き勝れたる人を擧げて劣人を例顯する也。經の出過二乘は迷謬の強きに就て二乘と云ふ、何ぞ等覺十地をも遮せざらん乎、故に後難なし。

○前二劫中雖云度二乘地、雖須菩提等猶能承佛威神衍說人法俱空、而於此秘密一乘心生驚疑、不知所趣乃名直過聲聞辟支佛地也。

三に前劫に對して釋す。前二劫とは初二劫を通じて云ふ。初劫には漸過二乘と釋し、二劫には至第二僧祇乃與二乘異也と釋せり。此の段に付て玉振鈔の意の云く、上來は一往戒賢、智光等の三時教に付て諸論に擬して出過の相を示し、具に法華、華嚴の兩經を引て不識の由を釋し、自下は再往四時教に約して出過の眞に爾前に超るに准じて釋す。四教とは五教章、起信義記等に於て釋する所の三時教の中に於て細論して、境空心有を以て第三時とし、境俱空を以て第四時と稱すること、華嚴玄談の所釋の如し。第二劫に於て細に二心を辨ずること、東密一家誰れか疑を容れん乎と、雖云度等とは兩重の與奪あり、初は二乘地を度することを與へて尙、大品般若の第二三假品に佛須菩提舍利弗に命じて佛力を加被して、般若を說かしむるの轉教附財ある故に、二乘聲聞も之れを解して說くことを得るを奪ふ。後は轉教附財を二乘に與へて、而於此秘乃至不知所趣を奪ふ。秘密一乘は能所擬に通じて見るも可也。但し所擬は天竺流布に約する故に慈恩嘉祥所解の法華なり。能擬は第十住心にして能寄の八・九の心には非ず、初地の入心にして所歎に非ざる故なり。直過二乘地等とは下の疏に之れを承けて釋して云く、住此不思議解脫時即是眞阿羅漢と。直の字を覺蒐所覽の本には眞に作るを佳とす。轉教附財に付て天台止觀六之一云く、須菩提空智偏明能於石室見仙、法身故大品中

被加說空、身子被加說般若、佛欲以大空並小空大智並小智故令二人轉教と。

○時大威德諸天、不見菩薩心所依處、咸生敬信、故釋提桓因作如是願言、今此上人不久成佛、若彼成佛時我當奉吉祥草、四天王亦生此念言、若此菩薩成佛時我當獻鉢、梵天王亦生此念、若此菩薩成佛時我當請轉法輪、故云親近敬禮也。

三に帝釋等の大天親近敬奉することを明す。此れ亦彼の顯教の外迹に准じて之れを明す。然るに當來に約して明かすを以て、上の出過二乘の現在に約する例と、不同なることを知るべし。心所依處とは眞言初地の菩薩の內證三摩地にして、大天等の識知すること能はざる所也。所證、內に明かなれば德光、外に溢るる故に、威德ある天來至して敬信を爲す也。經には帝釋を擧げて四王梵天を等取す。疏家は智度論第三十五卷の意に依て開釋する也。當奉吉祥草に付て指心鈔第十三云く、問草座成佛是天台三藏佛、何云密佛耶、答密成佛又四身別故、變化法身用草座何失と。初地の位に於て分に四種法身を成ずる故に、變化身の外用に草座を用ゆる也。又云く、問若爾灌頂阿闍梨授印可時、是令弟子成佛之儀式也、何唯華非草座乎、答私案初後夜位內證故坐華座、後朝歎德外用故坐草座、可悉之、今疏釋內證外用、此意歎、阿闍梨住化他門故坐草座歎、故知今經中菩提實義時、不用草座成佛、外迹可依彼座歎、可尋決矣と。然るに灌頂正覺壇の華座は他受用の座にして內證に非ず。故に若は草座、若は蓮華座、並に初地の外用に擬するに問なき也。

○已歎入眞言門、功德竟、然行者復以何法入此門耶、故經次云、所謂空性。

上來は第三劫所入の第十住心、即初地の內證外用の功德を讃歎し畢て、自下は正く能入の第三劫の心を明す。中に於て二あり、初

に結前生後、後に空性卽是の下、正く能入の方便を釋す。眞言門とは卽眞言卽門にして所入の門也。卽自心の曼荼羅海會なり。之れを開顯するを入と云ふ、卽初地の位也。已歎入眞言門功德竟とは結前、然行者等とは生後なり。經に所謂空性とは能入の法を述す。所謂空性乃至常應供養の經文は卽第三劫の正所明にして、世尊の歎德の欲に正兼ある中の正欲なり。正く第三劫正超の第八・第九の心を明さんと欲して、世尊八・九の心を明すに先きんじて、已超の第十心の功德を讃歎し給ふ。歎德既に了れば正所明の法、當さに說くべき也。第八法明道、第九除蓋障定にして初地の入心、近方便道なり、故に所謂空性等と云ふ。正欲已に成じぬれば兼欲の第二劫以下の見聞者信樂の遠方便も亦自ら成ずる也。

經の所謂空性乃至極無自性心生の文に付て、指心鈔第十三に七義を以て釋せり。中に於て第一義と第三義とは、高祖の十住心論

と、寶鑰下に此の一段の經文を引て、第八・第九の二心を證し給ふを以て的據として、所謂空性乃至鼻・舌・身・意の經を以て二心に通渉する文と爲して、淺深の二義を含めりとし、終りの極無自性心生の一句を以て、簡別を爲すと成す。又第二第七の兩義は高祖寶鑰下に極無自性心の一句、悉攝華嚴教盡と釋し給ふに依憑して所謂空性乃至鼻・舌・身・意の文を以ては第八心に局り、後の極無自性心生の一句は第九心に局るの義を立つ。今案ずる局の義は惣相に約する麁論なれども、心續生を本旨として之れを釋せり。又通の義は細論にして所驚覺同の義を示す、猶し宗祖十九執金剛秘釋に一の妙執金剛に於て、八・九二心に配屬するが如し。麁細の義門異りと雖、其の意懸かに會する也。又吾山の法住化主玉振鈔に於て、竊かに疏家と宗家との深意を研究して論じて云く、兩祖は其の出生の處と、出世の時代と遙かに隔てり、故に釋義も隨て

必しも一揆にあらず。疏家の釋成は正く心相と科するを以て、惑智相對轉昇の次第分明なれば、通局を見ずして足れりとす。印度流布には顯の兩一乘あるに非れば、唯密人に就て法明道と、除蓋障定を近方便として、滿足佛法の位に入ることを得れば、一人の轉進にして第八・第九の階次を爲すこと、前七の住心に於て修生の次第を顯すに異ならざる也。八・九の淺深分齊炳然たり。故に極無自性心生の一句を以て第九とす。一人轉昇、經文に分齊ありて通義に預らざる也。宗家の引證は正く續生を宗とし、咸く顯教に寄齊して眞言行者の進修を顯はす。然らざれば進修の次第を彰し難きを以て也。假令五天に顯の兩一乘の宗なしと雖、現に法華・佛華の兩經ありて、金剛頂及び守護經には第九心の驚覺を蒙て後位に進入するの義相を明說せり。今の空性等の文何ぞ唯眞言行者のみならん乎。前二劫に例同して之れを釋するに何の問か

あらん。況や和漢現に兩一乘のあるあり。九顯一密の續生大旨策勵の爲に、驚覺を爲すこと必しも一概ならず。或は第八にあり、或は第九にあり、之れに因て經文を釋するに通局の二門あり。宗家は今の一段の經文を以て八・九の淺深に通ずる文として、淺を以て第八を證し、深を以て第九を證す。淺深已に分れたるを以て別に證する也。淺は第三劫の未極にして卽第八住心の體、深は第三劫の正極にして第九住心の自分なり。二心同く所驚覺なれば、宗祖は合して一の妙執金剛と爲す。極無自性生の一句は第九住心の勝進分にして、諸佛の驚覺を蒙て後位の微妙に進まんとする所の心品なる故に、經には特に極無自性心生と說く。宗祖は第十一勝迅執金剛に配釋す。是れは此れ第三劫已極の心なりと雖、尙第九住心に攝す、何となれば五相成身以後、方に初地の入心に入るを以て也。故に宗家は八・九の住心を以て顯教と判ず。疏家の第

三劫の初より、初地の入心にして未極を第八心とし、已極は第九心にして初地の近方便とするには大に異ることを學すべし。(疏家は八・九の二心密人なる故に)此れ通門の意なり。

所謂空性乃至鼻・舌・身・意　第八住心天台

所謂空性乃至鼻・舌・身・意　第九住心の自分華嚴

以上通門の意なり。

宗家第八・第九の二心に所謂空性等の一段の文を引證し給ふに付て、經を讀むに古來兩傳あり。一は唯所謂空性乃至鼻・舌・身・意の前の八句のみにして見れば、則第八の空性無境心と爲り、後の極無自性心生の一句を加へて讀めば、則第九極無心と爲ると。義は然るべしと雖、文兩心に通ずるに非れば未だ善を盡さず。何となれば八・九の別は辨ずべしと雖、心續生の義明かならず。若し說が如くならば、第九心の所驚覺なると何を以てか之れを知ることを得ん。又一は所謂空性等の前八句に於て、具さに兩讀して而して後に終りに至て極無心生の一句を加へて讀むと。此の訓讀最佳とす。恐くは無畏三藏譯場に於ける大本の傳と云ふべき歟。三藏明かに大本を記憶して略本を譯する時に此の口傳あり。宗家此の相承の口決を得て、兩心に引證し給ふならん。心續生に於て秩序あり。第九所驚覺の所據に力ある也。此れを通門とす。然れども亦宗家に局門あり。宗家此の一段の文を以て八・九の兩心に引證し給ふことは、相承の旨趣なりと雖、略本の經の文面は然らざる故に。亦疏家の如く前の所謂空性等の八句を以て第八心に屬し、最後の一句を以て第九心を證し、以て且く他の妨難を遮し給ふのみ。殊に現在の經文に於て人をして信を生ぜしむる也。故に局門は疏家に在ては正分判なりと雖、宗家に於ては他の妨難を遣るの一往の分文なるべし。又宗家に付て論ずれば、廣く和漢に

涉て心續生を判じ給ふ故に、一段の八・九の心は必ず所寄齊なり。若し疏家に在ては印度流布に約する故に、八・九は定て能寄齊なり。故に一の經文に於て解釋を異にするは各據一義並不相違なり、徧失す可らずと。雷斧云く、稀世の卓見能く兩祖の意を得たりと稱すべし。

○空性卽是自心等虛空性、上文無量如虛空乃至正等覺顯現、卽喩此心也、前劫悟萬法唯心心外無法、今觀此心卽是如來、自然智、亦是毘盧遮那、遍一切身、以心如是故諸法亦如是、根塵皆入阿字門、故曰離於根境、影像不出常寂滅光、故曰無相、以心實相智覺心之實相、境智皆是般若波羅蜜、故曰無境界、以此中十喩望前十喩復成戲論、故曰越諸戲論。

後に正く能入の方便を明かす經文を釋す。中に於て大に二あり初に未極の第八心の文を釋し、後に行者得如の下、已極の第九心

の文を釋す。初の中に經に十一句あり、分て三とす、一に空の體相を本として明かし、二に第三重微の下、因中說果の三句を釋し、三に既不壞因の下、上轉に約して三諦卽一を裏として明す。第一の中に所謂空性乃至越諸戲論の五句あり、分て二とす。初に所謂空性の一句を釋して空性を明かす。空性卽是自心、等虛空性とは虛空無垢菩提心と云ふに同じ。自心卽淨菩提心なり、卽吾人平素境遇に感じて汎汎と生起する所の心に外ならず。此の心法界に周遍して虛空に等き故に等虛空性と云ふ。卽無始生死流轉の我執、轉じて淨菩提心に融會して無相なる性也、空性卽阿字なり、故に入阿字門と云ふ。開けば空假中の三諦、阿・婆・婆の三字と成り、合すれば一阿の有・空・不生の三義と成る。不橫不竪にして菩提心不二の本性なり。十住心論第八に娑字三諦究竟と釋するは、且く天台の三諦に約して釋す。娑字の三諦究竟すれば從顯入密して阿字

の三諦に歸入す。今は眞言行者に約する故に廣論と同じからず。此の不二本性が上の阿・娑・婆、下轉には三を全ふして卽有を本するを以て大悲胎藏生曼荼羅と云ふ。卽娑字の主る所、下衆生界を諦觀して謬らず、度人空しからざる也。然るに今は上轉進趣の故に三諦に卽すと雖、大空方に現はれて繫縛不可得也。此れ婆字の主る所、此の大空智顯現する位を地前の遮情とす。然れども初地の位に横具する五點の功德を、地前に開き設けたるものなる故に、顯の遮情と相似すと雖、其の顯はす所天殊地別なり。何となれば顯教の遮情は其の所顯眞如の空理に過ぎず、密教は其の所顯の眞理は表德實相にして、無盡莊嚴藏なるを以て也。眞言行者第三劫に至る時、遮情の理究て其の空理に卽する所の三諦顯現す、猶寅の刻の明相現の如く、卽法前得なり、此れを初法明道と名く。今の空性無境の第八心也。是を以て上の九句略答の頌の、無量如

虛空乃至正等覺顯現の文に合す。此の位は初地住位の法明道の卯の刻の明相現の如く、法俱得に非ずと雖、前二劫中に於て未だ曾て見ざる所也。此の位に於て證する所の法を空性と云ふ。性とは躰なる故に卽法明道の妙智の體性にして、大空三昧也。卽初地に開發する金剛寶藏の理體を全ふするの妙智を空性と云ふ。自心の本不生の中に自ら理と智とあり。其の不生の理を今無量如虛空と云ひ、常寂滅光と云ふ。其の不生の智を正等覺顯現と云ひ、如來自然智又般若波羅蜜と云ふ。而して毘盧遮那遍一切身は卽理智不二本初不生の身也。然るに今初地の入心空性の位に於て之れを云ふは、寅の刻の明相豈に卯の刻の明相の外ならん乎。此の理を以て知るべし、此の位は顯の遮情に似同すと雖、彼は理秘密、此れは暗字を體とし、彼は地前、此れは初地の入心也。彼此相似する所あれば寄齊すれども其の別雲泥也、知て混ずること勿れ。正

等覺顯現とは正等覺は正く初地の住心にあれども、顯現の言は初現を云ふ。初て越百六十心生廣大功德即是法明道最初顯現の時なり。後に前劫悟萬の下、經の離於根境無相無境界絶諸戲論の四句空相を明かす文を釋す。自ら四段あり、一に離於根境を釋す、前劫第七心の萬法唯心にして、眞心所現の現象界の萬有は皆空なりと立つに對して、第八心の色心の一切法本來不生不滅にして、現象即實在の眞理を以て當句を釋す。色心不二の故に根と塵との隔なし、故に離於根境と云ふ也。性相兩宗唯心に於て事理の別あることは前に辨ずるが如し。今は第二劫の中に於て細論して性宗眞心の唯心を以て所對とす。聲聞と緣覺とは人執品の正使斷と習氣斷との別、湛寂と寂然界とは人執斷と法執斷との別、寂然界と他緣大乘とは心外と心內との別、他緣と覺心とは唯心事理の別なり。是の如く次第に細論して斯に來れり。然るに前に

覺此心本不生即是漸入阿字門と釋す。之れに對して今根塵皆入阿字門と云ふ。故に相宗の事唯識に對するにあらざると明かも心續生の次第既に爾り、故に古來且く第六心を擧げて所對すと云ふは不可なり。今觀此心乃至遍一切身とは、此心とは眞言行者初地能入の第八心にして自心等虛空性の心なり。即是れ質多圓明の智心なり。此淨菩提心本不生の處に自ら本不生の智あり、此れを自然智と云ふ。自ら本不生の理あり、此れを遍一切身と云ふ。如と毗盧遮那とは此の本有の理智を一身に具して、不二なる淨菩提心の人體なり。此の段の釋は理智不二を以て要とす。理は所照の境、智は能照の心、即心境不二にして、境即般若、般若即境なるを以て不二と云ふ。天台文句九之一云く、境既無量無邊常住不滅、智亦如是豁大蓋大と。冥に眞言の教意に會せり。指心鈔第三兩箇の問答最も佳、他緣乘は法身は常住なれども報身は無常なり。四

智心品は有爲法なる故に論なし。覺心乘は法報併せて常住の義を談ずれども、報佛は有始無終と立つ。顯の第八心は理智共に無始無終にして冥會一際なる故に、境智共に實相也。境智共に般若なり。境卽般若、般若卽境なり。覺心乘に濫ず可らず。顯乘に於て對辨するに既に已に是の如し、況や初法明道に於てをや。又三論宗には境智共に實相と談ずと雖、未だ境智共に般若と云はず。又理智不二を說くと雖、心外の影像を遮簡して但し唯心の位に於て理智不二を談ず。故に上の疏に漸入阿字門と釋す。漸入とは攝相歸性の意なり。然るに顯の第八心、卽天台は但自心の本不生を明すのみにあらず、心外の影像も亦常寂滅光を出でざる故に、根塵皆入阿字門と云ふ。常寂滅光とは卽實相の理也。又漸入は諸法の末を一心の本源に歸すと雖、未だ一切法の末皆是れ本源と明かさず。皆入は影像の末皆咸く本源にして、阿字にあらざることな

しと論ず。然るに天台の皆入阿字門と、（指心鈔所引天台止觀第五之三無生敎門云云）第十秘密心との差別に就て天台、華嚴、眞言の三箇の一乘は顯密異と雖、理に於ては差別頗る辨じ難し。但し法華は三乘共聞なると、佛華は唯大菩薩の不思議乘なると、久已通達從果向因の聖者の所聞の法なるとの別あり。又俱に一卽一切一切卽一の深敎なりと雖、天台は事理無碍、佛華は事事無碍、眞言は事理俱密、又天台花嚴は萬有の本源に事を存せざると、眞言は法の本源に事理俱存する等を以て意を得て會す可き也。二に影像不出等とは無相の句を釋す。影像とは加持世界所現の應化身を云ふ。餘は准じて知るべし。眞影不二の故に無相なり。是れ則卽事而眞の意なり。三に以心實相等とは無境界の句を釋す。境智不二の故に無境界なり。四に以此中十喩等とは越諸戲論の句を釋す。麁に論ずれば前十喩とは惣じて初二劫の十喩也と雖、細論すれ

ば此中十喩とは第八心、能越の觀門なるを以て、前十喩は隨て所越の第七心觀門なるべき也。後心能越の十喩を以て前心所越の十喩に對望すれば、所越の十喩還復して戯論と成るを以て也。以此中十喩とは正く經の越の字を釋し、望前等の八字は經の諸戯論を釋す。能望は能越の第八心所觀の十喩、所望は所越の第七心所觀の十喩也。故に文を訓じて此中の十喩を以て前の十喩に望むれば、復て戯論と成ると讀むべし。此中の要は能越に在て所越にあらざる也。前後對望するに前心を戯論とし、後心を能越とするは、疏家此處に於て之を釋すと雖、若し細論すれば十住心皆然り、十地も亦然なり、故に第八心所觀の十喩も第九心に對望すれば亦復て戯論と成る也。所觀の十喩は其の當位にありては深修の法にして、戯論に非ずと雖、後位の勝心を生ずるに由て前法復て戯論と成る也。觀門に約すれば前心の所觀は後心に對して戯

論と成ると雖、所斷の惑に約すれば第三劫にありては、極細妄執を斷ずる故に、觀の相對と斷惑とは類す可らざる也。又第二劫は唯六喩なり、然るに今十喩と云ふ、言惣なりと知るべし。

○第三重、微細、百六十心、煩惱業壽、種除、復有佛樹、牙生、故曰等虛空無邊、一切佛法依、此相續生。

二に等虛空等の因中說果の三句の經を釋す。經文に正觀の戯論を越ることを示して越諸戯論と云ふ。故に次に正智の越妄を說くべきは必然の理なり。而るに其の文なきは經家の巧說にして、下の勸修擧益の段に復越一劫と說て、其の妄執斷を擧げて越諸戯論を影示し、此處にては越諸戯論を擧げて、以て斷妄を影示す。擧一示一巧說無碍なり。具には越諸戯論復越一劫等虛空等と說くべき也。第三重第十復越一劫の論草云く、第三劫、經文無正三妄斷、說今至擧益勸修文云復越一劫、正說越第三劫、義、偸顯先第三劫、

經文可有此說、是即經文巧妙也と。而して今の疏の文を見る時は、第三重微乃至業壽種除は復越一劫の經文の影顯する所を釋する文にして、第九心の所斷を顯す也。又擧益段の疏に復越百六十心一重細惑名度三大阿僧祇劫也と釋するは、第八心の所斷を顯す。何となれば、此處に第三重と云ひ、下に名度三祇と云ふは總相に論ずと雖、下に細惑と云ひ、此處に微細と云ふは極細妄執中に更に麁細を辨じて、第八の所斷には單に細と云ひ、第九には特に微細と云ふ也。第三重微乃至業壽種除とは經の等虛空の三字を釋す。次の復有佛樹牙生の六字は經の無邊佛法依此相續生の文を釋す、即第十住心なり。佛樹牙生とは本有の淨心より、修生の菩提心の芽を生ずる義を示す、即初地の位なり。業煩惱の種除けば豁然として無碍なること、虛空に等同なり、故に等虛空と云ふ、即遮情なり。然るに虛空所依と爲て宇宙の萬有を生ずるが如く、此

の大空智所依と爲て復て無邊の佛法を生ず。越妄所依と爲て能く佛樹牙を生ず、即因中說果なり。何となれば佛樹牙生の近所依は第九心なり。第八心は遠所依にして近依に非ず。又無邊佛法の佛樹牙生は第十の住心なり。然るを第八心の上に於て說く故に因中說果なり。第三重第九、八九淺深の論草云く、此一段文雖通八九、無邊一切佛法第十住心也、此所依等空心也、等空心第九心也、爲第八間越故不引之也と。業壽種とは相宗に約して釋すれば第八賴耶に自相と、因相と、果相との三相あり。業壽とは善惡の業種所感の惣報の果體、一期相續の壽命を云ふ、故に即果相なり。種とは現行の賴耶が任持する所の一切煩惱の種子を云ふ、故に因相なり。若し秘密に約して釋せば根本無明を種と名く。即一百六十心の無體の種子を大空智火を以て護摩して、一百六十乃至八萬の塵勞は無明即明の功德を顯現して、無邊一切佛法の金剛寶聚と

成る也。然るに今第八賴耶に約して明かす意は、第八賴耶は分段・變易二種生死の所依なり。密教の行人は一生皆成の故に人・法二執、二種生死、第三劫に至て頓斷して功德寶聚と頓成するを以て也。依此相續生とは第九等空の心を指して此と云ふ。目近の詞なる故に第八の空性は唯遠所依となるのみ也。即第九の等空の心に依て第十心相續して生ず。又無邊佛法但初地のみならず、牙の言の顯す所二地以上に通ず。況や相續生と云ふをや。法住師云く、皆是即極者流の違文なりと。

○既不壞因緣即入法界亦不動法界即是緣起、當知因緣生滅即是法界生滅、法界不生滅即是因緣不生滅、故曰離有爲無爲界。

三に上轉に約して三諦即一を裏として明す。中に於て三句あり、一に離有爲無爲界の句を釋す、古來以下の文を以て極無自性心を明すと科すは、般若寺上に所謂空性乃至等虛空等の文を以て

第八心を證し、離有爲無乃至自性心生の文を以て第九心を證するに依る。若し宗家に從へば尙ほ二心並說なり。今は疏家に就く、故に已に前劫の不融麁相を離れて轉じて第八心微細の三諦を得ることを明かす。次下に如是微細慧と云ふを以て知るべし。能寄齊の眞言行者の所觀なる故に、刄字の有・空・不生の三諦にして天台娑字の三諦にはあらざるなり。此の釋の中、因緣と生滅とは經の有爲を釋し、法界と不生滅とは經の無爲を釋す。不壞不動即入即是は經の離の字を釋す。經は前劫の隔歷の三諦を捨離することを明かす。故に離有爲無爲界と云ふ。疏は今の第八心不思議の三諦を明かす、故に即入即是と云ふ。法界とは即阿字本不生の眞理なり。因緣即入法界の故に離有爲界なり。法界即是緣起の故に離無爲界なり。又即入法界は空諦、即是緣起は假諦、二者綜合すれば中諦なり。

○若如來出世若不出世諸法法爾如是住故曰離諸造作。

二に離諸造作の句を釋す。一切諸法は皆悉く阿字本不生の理に住するを以て其の性常住にして、諸の爲作造作を離れて因緣所成の法にあらざる故に、諸法法爾等と云ふ。卽中諦を釋する也。此の位に於て初て阿字本不生の三諦現前す。卽初地入心法明道の顯現なり。

○如般若中一切法趣眼是趣不過猶如百川赴海更無去處是故當知眼卽是第一實際第一實際中眼尙不可得何況趣不趣耶耳鼻舌身意亦如是故曰離眼耳鼻舌身意。

三離眼耳等の句を釋す。上の離有爲等の經文は總じて阿字微妙の三諦を明し、此の段の文は別して三諦を明す疏の文の中に一切法趣乃至更無去處とは假諦なり。一切法は能趣にして眼根は所歸趣なり。能所趣ある故に有にして假諦卽俗諦なり。一切法が

眼根に歸趣して之れを超過することなきを是趣不過と云ふ。一の眼根中に攝し盡して一法として眼根を超過することなき故に、是れ卽大般若經第三百十五卷初分眞善友品と、大品般若經第十七等の意を取て釋す。故に如般若中と云ふ。譬の中の百川を以て一切法に比し、海を以て眼根に比するなり。是故當知乃至尙不可得とは空諦を明す。卽眞諦也。空中には能所趣不可得の故に。何況趣不趣耶とは卽是れ中道を辨ず。中道に雙照と雙遮とあり。趣は有にして不趣は空なる故に。亦有亦空雙照の中道なり。互奪相亡する故に趣不趣次の如く、非有非空の雙遮の中道なり。知るべし、空假中の三諦只一の眼根中にあることを。耳鼻等も准知すべき故に、亦如是と云ふ。經の離の字は不可得の義なる故に空なり。眼・耳・鼻・舌・身・意は卽假也。開て假空の二諦と爲し、合して一の中道とす。而して此の一段の疏釋は全く天台止觀第四之二云く、若得

此意初心凡夫能於一念圓棄諸蓋、故大品云一切法趣欲事、是趣不過、欲事尚不可得、何況當有趣不趣、釋云趣卽是有有能趣所趣、故卽辨俗諦、欲事不可得卽是明空、空中無能趣所趣卽辨眞諦、云何當有趣非趣、卽是辨中道、當知三諦只在一欲事耳と云ふ釋に依る。一行禪師漢地に生長して夙に天台學を練習し、造詣甚深し、故に義門の冥會する處あれば、義准して作釋する也。天台の釋を寫すに似たりと雖、意は眞言行者の第八心初法明道にある也。

○行者得如是微細慧時、觀一切染淨諸法、乃至少分猶如隣虛、無不從緣生者、若從緣生卽無自性、若無自性卽是本不生、本不生卽是心實際、心實際亦復不可得、故曰極無自性心生也。

初地能入の方便を釋する中に於て、上來は未極の第八心を明かす。十一句の經文を釋し畢て、自下は後に已極の第九心を明かす一句の經を釋す。中に於て三あり。一に前を躡み、二に心實際亦復

不可得とは正く當句を釋し、三に故曰極無等とは合經なり。前を躡む中に於て初に三諦を躡み、後に本不生卽是心實際とは心源に徹することを明かす。行者とは卽眞言行者の第九心除障三昧の位にして、心實際亦復不可得に管す。初地の入心に二心ある中、第八心は前半にして未極、第九心は後半にして已極なり。阿字融妙の三諦を觀ずる慧を微細慧と名く。如是の言の指す所、一離有爲無爲界、二離諸造作、三離眼耳等の三節あれば此の中の疏釋も隨て亦三節あり。觀一切染乃至是本不生とは前の離有爲無爲界の三諦を指す。無不從緣生者は假諦、若從緣生卽無自性は空諦、卽是本不生は中諦、卽阿字の有・空・不生の三義也。又本不生の言中に自ら不生不滅常住の義を具する故に卽前の離諸造作を指す。本不生卽是心實際とは前の離六根を指して釋す。心實際とは卽本有淨菩提を云ふ。第八心の位に於て是の如くの微細慧を得て融

妙の三諦を行ずと雖、上轉には空を以て本とすれば空智の用能く一切の妄想戯論を離る。之れに由て三觀次第に融妙となりて、遂に本不生際に徹す。卽心の實際にして三諦の極底なり。此の第八心の心實際の中道實相も亦復不可得と遮遣するを、心實際亦復不可得と云ふ、卽第九心なり。諸法無自性の觀門至極するを以て極無自性心と名く。卽遮情至極の觀門なり。疏家は八・九二心眞言行者に約するを以て是の如くなりと雖、若し宗家に約すれば然らず。二心並說する中に於て初一は第三劫未極の第八心にして、卽天台宗、後一は正極にして第九心の自分卽花嚴宗、二心共に地前に在りて所驚覺なり。密佛の驚覺を蒙り起て、第十の住心に進入する第九の勝進分を已極心と稱し、所寄齊に約して二心並說の義を成す。

初一第三劫未極の心、卽第八心卽天台宗、

後一第三劫正極の心、卽第九心卽華嚴宗、第九心の自分更に驚覺を蒙て入密せんと欲する心、卽第九心極無心の勝進分。

故に宗家に約すれば所寄齊なるを以て、天台一家の一心三觀卽娑字の三諦を以て解釋すべき也。心實際亦復不可得とは、正く極無自性心生の當句を釋す。心實際は第八心の當位にありては極底を究むと云ふと雖、後の第九心に望むれば尙是れ未極なるを以て、更に不可得と遮遣す。是の時に當て未極は轉じて極無自性と成り、事理無碍（天台）は轉じて事事無碍帝網無盡と（華嚴）成るが如しと雖、上轉には不守自性を本とすれば極無自性心と名くる也。眞言行者遮情の極底にして於業煩惱解脫の位なりと雖、未だ而業煩惱具依の表德實相に契はず。因位にして果にあらず、入心にして住心にあらず。密人たりと雖、階位を亡泯せざる也。極無心初地に入るとは云ふべし、入心の極なる故に。然れども第十住心

と云ふ可らず。入住別なる故に、因果異る故に。極無心の位にありて少く功力を用て當さに一切の佛法を滿足すべしと雖、直に第十秘密心と云ふ可らず。敎門に約せば是の如くなりと、實證門に約せば能寄齊の第九心遮情極る處に、第十の表德自ら任運に顯はる。敢て心佛の驚覺はなきにあらざるべきなれども、別に驚覺を要せざる也。惑品は同く理無の惑を斷ずと雖、第八は前半を斷じ、第九は後半を盡して遮情茲に究まりて第十心に流入し、表德の菩提心修顯す。然るに若し宗家に依らば所寄齊の八・九二心は斷じて地前にあり。法明道現はれざれば必ず驚覺を作して、開會方便して從顯入密せしむ。故に第三の極細妄執に三重を分て情有の惑を斷ずるに、前半・後半を分て次の如く第八・第九に之れを斷じ、更に理無の惑を斷じて方に初地に入る。故に所寄齊の八・九は地前にあり。敎門に約すれば斯の如くなりと雖、所寄齊に於て

も別に實證門の任運流入大に密人に同ずることを存せざるに非ず。遮情の理究まれば自ら表德顯はる。故に此の時は別に初夜成道を云はず。顯人直に密の初地に入ることを得。此れは別途の法相なり、酌酌あるべし。

○此心望前二劫猶如蓮華盛敷、若望後二心卽是果復成種、故曰如是初心佛說成佛因、故於業煩惱解脫而業煩惱具依、此中云佛說者世尊以十方三世佛爲證、言以此一事因緣爲衆生開淨知見、其道玄同也、行者解脫一切業煩惱時卽知一切業煩惱無非佛事、本自無有縛、令誰解脫耶、如良醫變毒爲藥用除衆病、又如虛空出過衆相而萬像具依。

第三劫の經文を釋するに大に三段ある中に於て、上來は第二に正く能入の密人の第八・第九心の法を說く經文を釋すること畢て、自下第三に總じて結して能所入の德を歎す。此の結歎は唯能

入の八・九に局るに非ず、所入の第十をも合じて惣して歎ずる也。中に於て大に兩段あり、初に後果に望めて總じて佛因なりと歎じ、後に若住此不の下地前の因に望めて初地應供の德を歎ず。初の中に三あり、一に總じて結歎し、二に故曰如是等とは合經、三に此中云佛の下別して釋す。總じて結歎する中に於て兼て前に望むると、正く後に望むるとの二知るべし。後の二心卽根と究竟との句に望めて總じて成佛の因と歎ずるは、前に眞言門修行菩薩行等と、先づ所入の初地の功德を讃歎するに付て、佛の欲に正と兼とある中の欲明超第三劫之心の正欲に合す。此心とは此は目近の詞なる故に、單に第九心を指すに似たりと雖、宗家の問答釋に今の歎德の文を擧げて云く、是何位菩薩耶、是初心菩薩也と釋し給ふに依て、歎德は正く初地の菩薩とす。故に此心とは卽經の如是初心也。此の初心は廣く第八の正入、第九の已入、第十の住位

に通渉するを以て、能所入を合して總じて結歎する也。前の經に云く、淨菩提心門名初法明道と。淨菩提心に既に八・九の二心を攝す。成佛の因中何ぞ二心を洩さん乎。前二劫に望て反て究竟とするも亦准知すべし。三句門なる故に法を攝すること寬くして狹隘ならず。五轉門中第八暗、第九惡、第十噁引字を合して一の方便究竟とするを以て例知すべし。蓮華盛敷と云ふも三心具に存せり。經の所謂空性乃至鼻舌身意迄は是れ第八未極の生、極無自性心生の一句は第九已極の生、此二は極無自性心の正生卽遮情の究る所にして、於業煩惱解脫也。第十住心の位に至て表德の理顯はるる時、而業煩惱具依なり。此の位は極無心の已生なり。如是初心の經亦三心を具する也。今は三句門にして總相に約して云ふ也。以上演る所は疏の意也。若し宗家に依らば別意あり。疏は八・九・十並に密人として能所入を合して、初二劫に相對して顯密對辨

を爲すことは二劫の終りの如し。故に第三劫中に重て對辨するの必用あるなし。宗家は和漢の流布に付て、九顯一密の法相を以て顯密對辨するを以て、十住心論第九に今の疏を引用すと雖、其の意を轉換して前二劫と云ふを、特に註を加て第二劫第三劫とし、疏の意は眞言行人に約して具に八・九・十の三心を明すと知ると雖、此の三心を惣合して初地と爲し、以て能對とし、顯の二劫三劫に望て對辨を爲せり。次で大日經と金剛頂とを引證して廣く驚覺を演じたり。又寶鑰第九心の下に是心望前顯教極果於後秘心と釋するも顯密對辨なり。高祖は疏家に依り給はざるには非れども、其の語を轉用し給ふことを察せざるべからず。然るに後世强て兩祖を會合せんとするは獨り疏家の意を知らざるのみならず、亦宗家の眞意を知らざる愚漢なり。依用す可らず。又委悉に文を料簡すれば、眞言行人の初地入心の八・九兩心は蓮華盛敷

の如し。第十の初地の住心は望後の果實復成種にして三位明歴歴たり。遮情究竟と、表德顯現と既に異れり。花は種子にあらざるを以て也。復とは還の義にして間に髮を容れざるの意なり。微細に分別すれば是の如くなりと雖、三句門に於て言惣に之れを云ふも敢て間なき也。又如是初心とは遠くは廣く能所入の三心を合して指し、近くは極無自性心生の生の字に、正生と已生とを含むを指す。初地の菩薩を初心と云ふ。究竟に對する故に、此の初心に入住あり。入に八・九ありて能入の方便なり。眞言行者なる故に阿字表德の三義を具修すと雖、尙ほ卽空を本旨とすれば、近加行と成て住位に任運流入す。住位は第十住心にして所入の實際なれば、而業煩惱具依と說て業煩惱等無非佛事にして、無盡の性德なる義を顯はす。然るに此の具依に付て疏の意は初地の入心に於て、遮情の觀門をもつて業惱を解脫すと雖、住心の位に於て表

德の實相卽自心の寶藏を開顯し證悟する時、業惱は轉して淨菩提心の功德と成る。故に業惱を德として具して此れが所依となる、故に具依と云ふ。具とは德具、依とは所依なり。宗家の意は第九の住心に於て、極細妄執を斷ずる故に於業煩惱解脫と云ふ。然れども尙微細妄執を殘す、故に而業煩惱具依と云ふ。斯の如く德具と縛具との不同ありと雖、各據一義なり。三に別釋の中に於て二あり、初に別して佛說なることを證し、後に行者解脫の下、別して於業煩惱等の二句を釋す。初の中に於て此中云佛乃至世佛爲證は標し、言以此一乃至道玄道也は一事道同の義を示す。此一事とは成佛の果を云ふ。因緣とは初地淨菩提心なり。淨知見とは一切衆生本有の佛智見、卽菩提心なり。開とは開示也。佛佛同道にして成佛の因緣たる眞淨の菩提心を以て衆生に開示すと也。異路なきを玄同と云ふ也。別して於業等の二句を釋す。中に於て亦二あ

り。初に法說、後に如良醫變の下譬說也。行者とは惣じて八・九・十の三心の人を指す。而して故曰初心等の合經、前の疏は總釋なり。經の初の如是初心成佛因故の二句を釋するに於て、望後は正釋、望前は助釋なり。而して助と正との義の故に於業等の後の二句を成す。助成の故に遮情の理の究ることを顯はして於業煩惱解脫と云ひ、正釋の故に表德の理顯はることを成して而業煩惱具依と云ふ。合經前の惣釋に於て述て餘すことなき故に、合經して故曰等と云ふ。然るに經前の釋、未だ具さならざるを以て合經後に別釋を作る也。解脫とは業惱は過患の法なりと思ふ執を轉捨するを云ふ。其の體を斷ずるに非ず、四明知禮の斷染碍相不斷其體と云ふが如し。本自無有等とは一切諸法本初不生にして縛脫なきを以て、表德本有の義を述成す。業惱の本性に德あれば反て行者をして業惱を解脫せしむる也。譬喩に二あり、良醫の譬は而業

煩惱具依の故に於業煩惱解脫せりと喩顯するを以て不斷而斷にして反喩なり。變毒爲藥とは而業煩惱具依にして表德を顯はす。用除衆病とは於業煩惱解脫なり。又變毒は卽空にして爲藥は卽有なり。良醫の二を具するは雙照の中道なり。卽本有淨心阿字の具德の空・有・不生の三義なり。本性に依て除障の作用を起すなり。虛空の喩は斷而不斷を顯はす、故に順喩なると知るべし。又初喩は本具の德に依て、除障用を修起することを明かし、後喩は煩惱業を斷ずるに依て本有の功德を顯はすことを明かす。故に此の二喩あり。凡そ經の業煩惱具依の文に於て兩意を含說せり。謂く表德本具と、微細妄執未斷となり。宗家は多く顯密對辨に約する故に微細妄執に約して釋し給ふは、守護釋と略論の驚覺の如し。疏家は成佛の眞因を成ぜんと欲するを以て具德の義に依る。經意多含の故に取捨す可らず。兩祖時に隨ひ機に投じ給ふ、各據

一義なりとは玉振鈔の意なり。

○若住此不思議解脫時卽是眞阿羅漢不著於有爲無爲一切世間應受廣大供養故經云世間宗奉常應供養也。

上來は初地入住の心、後の成佛の果に望て因と成ることを讃歎する經文を釋すること畢て、自下は後に地前の因に望て初地應供の功德を讃歎する經文を釋す。中に於て二あり、初に正釋、後に復次阿闍の下復次釋なり。正釋の中に亦二あり、初に正く釋し、後に故經云世等とは合經也。三劫遮情の因に望て別に初地の位を眞の阿羅漢なりと歎ず。住此不思議解脫時とは、惣じて初地の入住の三心を指す。於業煩惱解脫而業煩惱具依の解脫なる故に不思議と云ふ。阿羅漢に殺賊と、不生と、應供との三義あることは常の如し。而して今の住此解脫は殺賊の義、不著於有爲無爲は經の離有爲無爲界にして不生の義也。不著の二字は不生の義を顯は

す。應受供養は應供の義なり。有爲無爲に滯著せざるが故に、有爲無爲に於て無碍自在なり。有爲法に無碍自在なるが故に、因緣事法を壞せずして法界に入る。無爲法に無碍自在なるが故に、法界を全ふして行化自在なり。此れを眞の阿羅漢と云ふ。一切世間等とは正く果德の應供を明す。卽地前三劫修練の遮情に對して第十摩尼の表德に就て眞の應供なりと歎ずる也。

○復次阿闍梨欲明此應供義故、統論三劫始終作寶珠譬喩猶如有如意寶在石礦之中、以世人不識故棄在衢路之間與瓦礫無異、然別寶者見有微相纔影彰於外、卽便識之先用利鐵鐫去鈍石、既近寶玉、其石漸耎、復以諸藥食之使礦穢消化、而復不傷其質、爾時麁垢已除尙有細垢、既洗以灰水磨以淨疊種種方便而瑩發之、既得光顯置之高幢能隨一切所求普雨衆物、爾時世人生奇特想尊重是寶猶如大天、以能充滿所希願故、然此寶

於一時間普應衆心隨其所得各各差別、然此衆物爲於寶中先有耶、先無耶、若先有者卽此小珠何能頓藏衆物、若先無者又何能頓雨衆物。

復次釋の中に於て大に二に分つ。初に寶珠の譬を取て釋し、後に菩提心本末の因緣に約して釋す。初の中に亦二あり、初に標、後に猶如有如の下、隨釋なり。標に阿闍梨とは若し菩提阿闍梨と云はゞ金剛智三藏なるべし。一行記主初金剛智に從て金剛界を受くる故に、單に阿闍梨と云はゞ無畏三藏なり。名を標せざるは敬儀を表するを以て也。大日經疏一部都て善無畏の口授なりと雖、今殊に別して阿闍梨と標稱するは別時の口授なるとを顯はす也。故經云世等の合經の前に法花經信解品の我等今者眞阿羅漢等の文に擬宜して略して應供の義を顯はすと雖、未だ前三劫に對望して統論し、所得の果は獨り第十住心に在りて專ら應供の德

なることを廣釋せざる故に、更に別時の說を擧げて復次釋を作す也。寶珠の譬喩は大日經第七眞言行學處品に、淨菩提心如意寶滿世出世勝希願と說くに依る。故に下疏云く、何況衆生菩提心寶耶と。疏の中往往に寶珠の喩を出すことは、一切衆生本有淨菩提心如意寶に本付かしめんと欲するにあり。殊に八祖相承の秘訣あり、忽緒に過ぐ可らず。而して寶珠の譬喩三劫に貫通することは、文理分明なるを以て研究を要せずと雖、此の三劫の始終に十住心を具するや否は、古來未決の問題なり。（指心鈔第十四に四義を出だせり）然るに聖憲和尙第三重第十に於て、寶珠譬喩の論題を揭げて之れを訣擇し、廣く十住心に通ずと成立せり。其の意は經の顯文に約すれば出世間に局ると雖、深意を探れば凡そ一切の妄執を束ねて三劫に收む。彼の能越の心を以て心續生と爲す。故に假令一毫の微善なりと雖、三妄能越の心と成るべし。何ぞ三劫能越の攝屬にあらざらん乎。（第一理由）又三劫六無畏は開合の不同なり。然るに六無畏既に世間に通ずるを以て三劫も亦世間に通ずべし。（第二理由）と。此れ三劫に世間三箇の住心を攝するの理由なり。又第十の住心を攝することは、高祖大師第三劫の標句の經文を以て第十住心を證し給ふを以て的證とす。而して三劫の顯文出世間に局るを通じて、經の顯相は三妄能越の心に有漏無漏の二位ある中に於て、且く無漏心に約して三劫の說相來る故なりと會す。此の義最佳なり。故に今の寶珠の譬喩も廣く十住心に通ずる也。隨釋の中に於て二あり、初に開譬、後に卽此世間の下合譬なり。開譬の中に亦二あり、初に寶珠の轉成を明かし、後に然此寶於の下寶體の不思議を明かす、初の轉成を明かす中に七段あり。一に寶珠の石礦中にあるを以て第一住心に喩ふ、是れ則淨心生起の由漸也。如意寶とは寶珠は喩の體なり、卽本有淨菩提

心に喩ふ。故に前九心に於ても敢て遮せざる也。兩種種寶を發用の至極と爲す。此れ唯第十の住心にあり。此の秘密莊嚴藏を得るを此の譬喩の至要とす。灰水瑩拭も尙是れ之れが方便加行也。瓦礫無異とは第一の住心なり。二に然別寶者乃至影彰於外は世間の人天乘に比す。微相纔彰は第二第三の住心なり。三に卽便識之乃至鐫去鈍石は初劫に比す。利鐵鐫去は第四第五住心なり。四に既近寶玉乃至不傷其質は第二劫に比す。礦穢消化は第六・第七住心なり。五に爾時麁垢乃至而瑩發之は第三劫に比す。以灰水磨は第八・第九住心なり。六に既得光顯乃至普雨衆物は第十住心に比す。卽初地の住心以上なり。七に爾時世人乃至所希願故は世人の尊重を釋す。寶體不思議を明かす中に然此衆物の下推研して其不思議を明かす也。

○卽此世間寶性已不可思議、何況衆生菩提心寶耶、是故諸善知識纔見衆生世間八心適萠動時、卽便識是眞實知有可鑒之理、如彼相者以曾多識名寶是以遇便識之、諸佛菩薩亦爾久已證知親從一毫之善自致大菩提道。

後に合譬の中に於て二あり、初に寄齊門に約して合す。此れに二意あり、正く直往密人の背暗向明を明し、兼ては迂回の從顯入密を存置す。後に若行者直の下寄齊の中に於て顯密對辨を爲す。卽所寄齊を以て所對となす也。初の中に亦二あり、初に寶體の不思議に合し、後に是故諸善の下、寶の轉成に合す。中に於て六段あり、一に微相彰外に合す。中に於て二あり、此れは初に正く合す。八心萠動は第二住心なり。

○是故鑑彼情機、卽大歡喜方便誘進令受三歸如前已分別說、譬如收彼頑石置在家中。

後に剩へ頑石を收むるに合す。誘進令受三歸は第三住心なり。

○次以三種三心、拔業煩惱、根無明種子、如利鐵開鑿去其麁鑛。二に鈍石を鐫り去るに合す。三種三心とは三種は見・修・無學の三道、三心は卽三妄にして見道の三妄は我倒所生の三毒、修道は根境識、無學道は業と煩惱との株杌と無明の種子なることは前の如し。今拔業等とは見修二道には業と煩惱と無明とを除き、無學道には其の根本種子を拔く也。種子とは卽非想地、第九品の惑にして無學聖人最難斷處なり。無學所斷の根本種子に習氣を含說すれば緣覺乘なり。故に第四第五住心なり。

○次觀無緣乘、法無我性、如漸至奥處、以藥物消化而不傷之。三に其石漸奥に合す。無緣乘とは第二劫なり。第六心を擧げて第七心を影顯す。

○次生極無自性心、如灰水瑩拭使極光淨。四に瑩拭光淨に合す、卽第三劫なり。第九心を擧げて第八心を影

顯す。

○爾時生於佛家、名置在高幢、雨種種寶。五に在幢雨寶に合す、第十住心卽初地の位に住するを生於佛家と云ふ、佛家とは淨菩提心なり。之れを親證するを生と云ふ、卽本有淨菩提心を修生する也。遮情極る時卽表德顯はる。然るに眞言行者の遮情は三劫の間に於て分分に漸く顯はるるを以て、次の字を置て次第差別を顯す。而して遮情の觀に依て暗去る。爾時に表德の明顯はるゝを明來暗去の如く、衡の低昂同時なるが如くなる故に爾時と云ふて次と云はざる也。迂廻の從顯入密の機に必ず驚覺を要するが如くにはあらずと顯す意なり。第八心の入位第九心の斷惑共に初地の入心なる故に無間道なり。第十秘密莊嚴心は解脫道なり。此の位に於て業惱を淨菩提心の功德にして無非佛事と證知するを、而業煩惱具依と云ふ。上を承けて而と

云ふ、而の字高く著眼すべし。眞言行人最初の金剛寶藏開發なれば、置在高幢雨種種寶に喩ふるなり。疏家は七顯三密の法相なるを以て、高祖の九顯一密の法相にして、九顯は地前唯一密のみ地上なるには同じからざる也。

○以此因緣故堪受世間廣大供養也。

六に人生奇特に合す。此の一段の疏の釋文に付て連鎖次第を辨せば、上來無緣乘には第六心を擧げて第七心を影示し、顯人に寄せて以て密人の修生の淺深を顯はし、兼て所寄齊顯敎の從顯入密を辨ずることは初二劫の如し。極無自性は第九を擧げて第八を影示し、進で密人眞證の能入近方便を述す。生於佛家は次第を逐て所入の第十住心淨菩提心を明して、順次に修入の次第を演ずる也。初二劫は廣く顯人の斷證に寄齊すと雖、意眞言行人の修生の淺深にあり。此の眞言行者の比來次第を承けて相續て若行

者と云ふ。故に自下を全く別節として約頓入と科す可らず。何の理由ありて若行者以上の釋を以て從顯入密迂回の機と爲し、以下を以て直往の機に付て釋すと爲す乎、況や顯密を乎。指心鈔第十四二義を出すと雖、何れも不可なり。

○若行者直從眞言門得見心寶如仙人善呪術以神力取之、雖巧拙難易不同而獲寶終無異路。

後に寄齊の中に於て顯密對辨を爲す。迂廻の機の未だ入密せざる者、即所寄齊を以て所對として直往の機の速疾を明かす。行者とは能寄齊の三劫漸次進行の人を指すと雖、迂廻の機に對するを以て特に直從と云ひ、神力取之と云ふ也。又迂廻の機は拙にして難なり。入密は文底にあり、直往は巧にして易なり。正く明す速疾神力なり。即巧拙難易の不同を與へて獲寶無異を奪ふ。彼の迂廻の機終に入密すべき故に獲寶無異と釋する也。

○故此經從淺至深廣明心相皆爲開示菩提心本末因緣若但依常途法相則不得言諸佛大秘密我今悉開衍也。

上來寶珠の譬喩を取て三劫を統論すること畢て、大文第二に淨菩提心本末の因緣に約して三劫を統論す。中に於て初に順釋、後に若但依常等とは反顯なり。從淺至深とは卽心續生背暗向明の次第を云ふ。故に諸佛大秘密の文を引證す、心續生とは經の顯文に約すれば唯八心段に局る故に、上の疏に以下答心續生義也と科す。然れども義として廣く三劫六無畏十住心に通ずることを遮せざる也。故に宗家は從此以下十種住心佛答心相續之義也と釋し給ふ、兩祖一揆なり。異論を挿む可らず。廣明心相とは卽三劫所有の心相を指す。然るに已に淺深と云ひ、本末と云ふ、以て竪次第を顯はす。故に三劫の心相亦兼て心續生の義なるを知るべし。故に諸佛大秘密の經文に合する也。心續生の外に別に心相ありと云ふにはあらざる也。菩提心本末因緣とは行者の本有の淨菩提心を菩提心と云ふ。之れを開顯修生する本因緣は第十秘密莊嚴心卽初地以上なり。何となれば微細妄執を斷じて親く本有の淨心を修證する故に卽極と、次證と、機に別ありと雖、同く本因緣なり。末因緣とは地前三劫の間の行を云ふ。相似比觀の位にして未だ親證せざる故に。而して本末の因緣唯三劫に局るにあらず。十地亦是れ本因緣の分齊なり。十地何ぞ我今悉開衍の外ならんや。

又菩提心本末因緣に付て玉振鈔八末云く、菩提心の體に横竪不二の三句五轉を具足せり。斯の如くの三句五轉は阿字の發心修行菩提涅槃方便具足の五點を以て其の體とす。此の五點を因として以て未來の横に五點を頓得すると、竪に五點を經歷すると の機緣に待す。故に因は菩提心本具の五點、緣は未來の機緣なり。

是の如くの因縁和合して若くは横に、若しくは竪に、密機の爲に地前三劫に顯現するを本因縁と云ふ。本とは地前三劫の間の五轉三句なり。是れ此れは所生の法なり。此の三句五轉の法密人の爲めに顯現する故に本と云ふ。此の本が能生の因縁を因縁と云ふ、卽菩提心所具の本之因縁なり。横の機は横修の故に三劫を超越す、三大僧祇越二於一念一阿字一と云ふは此れなり。是れ則發心卽到と、地前卽極との機の所作なり。初地卽極と、地上次證との機は竪に三劫を經て五轉を行ず。此の相似比觀の五轉を以て因とし、顯教の機を緣とするに由て生ずる所の三劫を經て、斷惑證理するを末因緣と云ふ。彼の顯教の經劫斷證は末なり。此が因緣と成る故に末之因緣なり。密教の地前三劫の斷證に對すれば末なる故に末因緣と云ふ也。故に本因緣は直往の機に約して云ひ、末因緣は迂廻の機に約して云ふと雖、寄齊の本意は獨り密人の修生の

淺深を教示するのみに非ず。亦彼の迂廻の機をして從顯入密せしむるにある故なり。而して諸佛大秘密亦十地の横竪無盡を含す此れを本中の本とす。十地何ぞ悉開衍の外ならん乎。取意 約言すれば本は眞言行人の三劫の間、所生の五轉因は本有の五點、緣は未來機緣の五點なり。又末は顯教時分の間、所生の五轉、因は密の地前の五轉、緣は顯教の機緣なり。故に惣じて因緣は能生の法、本末は所生の法也。本末相對直往迂廻相對は知るべし、此れ亦一義なり、參考せよ。更に論ずべき義あり。聖憲師は所寄齊の顯教は各自の極果に止て轉昇せず。何となれば彼れは後位の微妙を知らざる故に心品轉昇は唯能寄齊にありと。法住師は當經の所寄齊は普通の顯教と異る故に、心品轉昇し終に從顯入密すと成立す。今考て云く、經文の顯相に約すれば無論憲師の說の如くなるべし。然れども文底に潛む所の佛の本旨に約すれば法住師の說

の如くなるべし。佛の大悲は無限の故に獲寶無異の疏の釋此深旨を顯はす者歟。

○經云秘密主信解行地觀察三心無量波羅蜜多慧觀、四攝法、信解地、無對無量不思議、建立十心無邊智生者。

十地段の經文を釋するに、大に分て兩段と爲す。初に十地の相を明す經文を釋し、後に經云我一切の下無盡莊嚴の境界等の因緣と爲る勝相を明かす經文を釋す。初の中に亦二あり、初に正く地相を明かし、後に然此經宗の下淺深の相を辨ず、初の中に亦二あり、此れは一に經文を牒す。上の疏の三劫段の始めに秘密主一・二・三・四・五乃至度於信解の經文を惣牒して、科して亦是答諸心相及心殊異也と。若し文に就て別して科せば、三劫を諸心相と科し、十地段を心殊異と科すべし。何となれば三劫は惑智相對して其の相貌を明かす。故に今の經に無對無量不思議と說くは殊異の義を示す。故に若し義に就かば三劫十地を惣通して、諸佛大秘密外道不能識の心續生にして、横竪無碍の大曼荼羅なり。何となれば十一地は中臺の本身、十地は八葉、三劫は即外三重院を標幟するを以て也。三劫に付て地前か、地上に通ずるかは古來の異說なりと雖、三劫地前は疏家宗家兩祖一揆なり。廣澤西院流の祖師堀池の信證僧正は前九種の住心を合して六無畏と爲し、第十住心に十地を開て眞言門とし、十六重玄義を以て眞言行者の次第證入を明かすは、實に准據とすべき也。今の經多くは有相劣慧の機に約して說くを以ての故に。然るに信證僧正の意は地前地上を以て顯密の差別として、地前を唯顯とするは未だ能所寄齊の眞理を明めざるに相似て妙ならず。又寶生阿闍梨の地前竪、地上横と立つるは、地上は初地卽極に局る故に、萬差の機類を統攝すること能はざるを以て未だ可ならず。又地前三劫は宗の深旨なりと

雖、若し三劫の位を常途に寄せて顯す時は、地上二劫の法相を兼存す。故に疏の中に於て往往に、曼荼羅の初二重を十住菩薩と稱す。（十住とは十地なり）然りと雖、此れ傍義にして正宗に非ず。疏家に此の正兼の兩意あるこを知るべし。又宗家に約すれば九顯一密亦十密として專ら對辨を旨とす。若し疏家に約すれば七顯三密の故に、八・九の二心は初地の入心住心の位に至て滿足一切佛法にして、表德方に顯はるゝ也。若し即極の機に約すれば此の位即究竟の佛果、若し不極の人なれば十地分證の故に信解行地と名け、到於修行地と名く。信解の名は唯因位に局て果位に通ずるに非ず。今の疏の唯如來名究竟一切智地の釋の唯の字、此の旨を顯はせり。前の經如來信解遊戲等と說くと雖、因の信解を果に從て以て如來信解と名くる也。信解行地とは初地の位に入證して親く淨菩提心を開顯し、深く信解して六度萬行を行ずる故に信

解行と云ふ。地とは萬行を出生する故に地と名くる也。卽究竟一切智地に對する十地の惣名なり。大日經宗には顯教に寄齊して地前を明かす。故に三劫六無畏等明かに說けり。金剛頂宗には曲く地上を明かすを以ての故に、五相十六大生等說文分明なり。二經影略して遂に一揆を爲せり。大凡そ三劫と、十地との建立に就て前の三劫は顯密對辨して能所寄齊を論ず。此れに兼正の二意あり。正くは眞言行者の漸機は地前に最初發心して入壇灌頂等の三密の行を修して、三妄を斷盡して初地淨菩提心に入る。此の淨心地前の最初發心より初地に至る迄、漸次に增明するを顯教の斷惑證理に寄せ、齊めて之れを顯はす。故に眞言行者の淨菩提心に遮情・表德の二ある中の遮情の邊を寄齊して示す。十地は表德の位にして對待を出過する也。兼ては三劫に於て寄齊を論ずるは、從顯入密の義を示さんが爲なり。十地は出過待對にして能

所寄齊を離れて、表德の實義を證する位なり。觀察三心とは、三心とは因・根・究竟の三句なり。此れに長短あり。無量波羅蜜多慧觀とは十地の地地に於て、修する所の六度萬行なり。此の萬行般若と相應せざれば波羅蜜多を成ぜざる故に、慧觀と云ふ、慧卽觀なり。四攝法は知るべし。是れ則根の句なり。經の信解行地、觀察三心の二句なり。惣標にして無量以下は別句なり。故に觀察の二字は無量以下に貫通せざる也。又能寄齊の八・九二心は初地の入心なる故に惑智相對す。然るに住心の位は自ら惑智相對を離るる故に無對と云ふ。卽遮情にして空なり。此の空に卽して諸の功德を有するを無量と云ふ。卽表德也。此の有・空・不二の中道實相を不思議と云ふ。建立十心とは疏に引く所の華嚴經所說の利益心等を云ふ。無邊智生とは十心に各各十心を具する等、其の邊際なき故に。又此の智所證の淨菩提心の理と冥會して法界に周遍する故に

無邊と云ふ也。

○此經宗從淨菩提心以上十住地皆是信解中行唯如來名究竟一切智地如華嚴中初地菩薩能信如來本行所入信成就諸波羅蜜信入諸勝地信成就力信具足無所畏信生長不可壞不共佛法信不思議佛法信出生無中邊佛境界信隨入如來無量境界信成就果於如是諸事其心畢竟不可破壞不復隨他緣轉故名信解行地亦名到於修行地也。

後に作釋の中に於て三あり、一に信解行地觀察三心の總標の二句を釋す。中に於て二あり、初に別して信解行地を釋し、後に觀察三心の下別して觀察三心を釋す。初の中に亦二あり、初に因に約して果を簡で得名し、後に亦名到於等とは果に對して亦名を立つ。初の中に立義と引證との二あり、知るべし。顯敎假立の地位に簡で此經宗と標す。此の經の十地は果上橫具の因・行・證・入の功德

を竪に別開して因人の行位とする故に、顯家の因行の船筏の如くなると同日の論に非ず。横卽竪なる卽信解行地なり。淨菩提心とは初地なり。十住地とは十地を云ふ。然るに住と云ふは理智相應して智能く理に住するを住と名く。理に住する智、能く諸の功德を生ずる故に地と名く。地は喩に約して名くる也。此の住地に十の數を帶する故に十住地と名く、一分の帶數釋なり。信解中行とは疏の意に依るに信に深信と、信解との二あり。地前は深信を本とす。相似比觀の故に地上は信解を旨とす。淨菩提心の理を親證して發す所の白淨信心は、實解と相應するが故に。而して此の十地の行、信解を所依として起る故に、信解中行と云ふ。中の字は依の第七轉なり。究竟一切智地とは十一地佛果を云ふ。初地より分分に暗を去り、漸漸に明を證して轉深轉廣の能滿足の位を信解地と名け、亦は到於修行地と稱す。初て初地に入て本有の菩提心に安住する心を菩提心爲因の旬の位とす。阿字の別德の金剛薩埵所住の三昧なり。念念不退に此の本有菩提心に安住して、進修するは修菩提の行にして第十地に至る迄、大悲爲根の句にして阿引字なり。五轉門には開て菩提暗字、涅槃惡字、方便究竟噁引字と爲すと雖、三句門には合して一の究竟、第十地噁引字と爲す也。是れ則今の所明なり。但し菩提涅槃を根に屬すると、究竟の句に屬するとの兩邊あるべし。然るに下に三心を釋して至第八地以去皆名方便地と云ふは、下に就前三句義中更開佛地と釋する起因なり。三句の法門は甚深にして一准ならざる故に、信解の因に於て義門に約して更に三句を觀ずることを明かす也。故に相違あらず。疏家の釋は其處を逐て法相を施設すること不同なり。先づ信解行地を釋するには十地を總じて行として、中因發心を

別に說て因とし、東因卽初地發心を行に屬して第十地に至る。又十地の外に別に究竟を說て唯如來名等と釋して尅實に論を爲し、又觀察三心を釋するには十地の中に於て更に三句を辨じ、修生の菩提心を以て因の句と爲す。故に十大願を發起して歸本の心を起すを發心の相とす。卽二利の大心にして東因發心の義なり。差別研尋して解すべし、如華嚴中の下引證なり。中に於て初に信を證し、後に於如是諸の下解を證す。初の中に能信如來本行所入等の三句は因、後の七句は果なり。此の文は唐譯の經第三十四、晉譯の經第二十四に出たり。本行所入とは佛因位所入の三昧を云ふ。諸波羅蜜とは六度萬行、諸勝地とは菩薩の十地、力とは十力、無所畏とは四無所畏、不共佛法とは十八不共法、無中邊佛境界とは中道實相、無量境界とは一切種智所緣の境界を云ふ。又畢竟不可破壞とは自ら破壞せざるを云ひ、不復隨他緣轉とは亦他の爲に轉ぜられざるを云ふ。是れ慧解の力なり。故名信解行地とは結す。亦名到於修行地とは初地の異名なり。初地の菩薩は進で第二地以上の修行に到る故に此の名を立つ。疏第七云く、若到修行地授不思議果、此修行地卽是淨菩提心初法明門と。

○觀察三心卽是因根究竟心、若通論信解地則是初地、菩薩得此虛空無垢菩提心、時自然於十無盡界生十大願、乃至滿足百萬阿僧祇大願、以此卽是菩提心爲因、從二地以去增修大悲萬行、卽是無盡大願於十法界生根、乃至漸次增長至第八地、以去皆名方便地、佛性論云八地以上境界皆同、但約方便爲階降耳。

後に別して觀察三心を釋す。中に於て二あり、初に標列、後に若通論信乃至爲階降耳は位に配す。中に於て三あり、初に因の句を初地に配す。十無盡界とは晉譯華嚴經第二十四十地品に十不可盡を說く。一衆生不可盡、二世界不可盡、三虛空不可盡、四法界不可盡、

五涅槃不可盡、六佛出世不可盡、七諸佛智慧不可盡、八心所緣不可盡、九起智不可盡、十世間轉法轉智轉不可盡なり。經云く若衆生界盡我願乃盡衆生界定不可盡乃至我諸願亦不可盡と。探玄記第十一之れを釋す。十大願とは探玄記第十一云く、願是希求義と。次に梁の攝論第十二に依て十大願を列せり。

一供養願　師僧及び佛を供養せんと願ず。
二受持願　妙勝法を受持せんと願ず。
三轉法輪願　大集會中に於て妙法輪を轉せんと願ず。
四修行願　如說一切菩薩の正行を行せんと願ず。
五成就願　一切衆生に三乘の善根を成就せしめんと願ず。
六承事願　諸佛の國土に往て常に諸佛を見恒に敬事することを得て正法を聽かんと願ず。
七淨土願　清淨の國土に於て正法及び能修の衆生を安立せんと願ず。
八不離願　一切の生處に於て恒に諸佛菩薩に離れず同意行を得んと願ず。
九利益願　一切時に於て恒に利益衆生の事を作して、空く過ぐることなからんと願ず。
十正覺願　一切衆生と與に無上菩提を得て恒に佛事を作さんと願ず。

此の十大願を發すは上求・下化の二利の菩提心にして、東因發心なり。前の信解行地を釋する段の中因發心には同じからず。二に從二地以の下根の句を二地以上に配す。六度萬行は大悲爲根なり。此れを於十法界生根と云ふ。無盡大願とは初地因の句を云ふ。因の句の上に於て起す所の萬行を根と云ふ。又十法界とは地獄等の十界也。因根の差別は、十無盡界に於て發願すると發行するとの異にして、進趣すれば愈深廣なり。然れども其の物體は眞淨の菩提心にして同一なり。三に乃至漸次の下究竟を八地以上に配す。是の如く進で愈深廣なる功德を成就滿足するを方便究竟とす。故に其の法體は同一にして其の位の異る迄なり。今觀察三

心を解する一段は信解行地の中に於て更に三句を辨ず。修生の菩提心を因とし、歸本の心を發すを以て發心の相とす。二地乃至七地を根とし、八地以上を以て方便究竟とす。八地以上は因果の別ありと雖、共に無相無功用にして純無漏心相續するを以て、共に方便と爲すは天親菩薩の意なり。故に佛性論を引證す。此れ是は卽順常途の釋にして、實義にあらず。卽教道門の施設なり。若し實義に約すれば方便を究竟と爲す。故に疏の意は第十一地佛果に限る也。然るに若し方便爲究竟を宗家と、山家との意に約すれば、向上向下文を讀むに異ありて、向上方便には方便をもて究竟を爲すと讀む。卽山家大師の隨順菩提方便なり。向下には方便をもて究竟とすと讀む。卽山家の隨順衆生方便なり。若し出體に約すれば向上は卽順常途の敎道門、向下は實義門なり、佛性論は全部四卷天親菩薩造、今の文は第四卷にあり。境界皆同とは七地以前は有漏心無漏心間雜して起ると雖、八地以上は純無漏相續なるを云ふ。但約方便爲階降耳とは、八・九・十の三地を次の如く下・中・上の三方便に配するを云ふ也。

○若觀一一地亦自有三心如以衆多十因緣得入初地名爲因緣既安住已以種種大悲萬行淨治是地名爲根說淨治地果相及方便業名究竟餘皆准此此經無量波羅蜜多四攝法卽是治地也行者從此無有待對出過心量不思議地有十心無邊智生卽是初地果相也。

上來信解行地、觀察三心の惣標の二句を釋すること畢て、自下二に無量波羅乃至無邊智生の別句を釋す。中に於て總じて三あり、一に經前の總釋、二に此經無量の下經に合す。三は次の段也、一の中に於て二あり、初に標立、二に如以衆多の下隨て釋す。總標の句を釋するには長の三句を以て本とし、別句を釋するには短の三

句を旨として、總別相互に長短の三句を顯す也。隨て釋する中に於て亦二あり、初に且く初地に就て釋し、二に餘皆准此の一句は餘の二地以上を例す。初の中に因根究竟の三あり、知るべし。衆多十因緣とは唐譯華嚴經第三十四、晉譯の經第二十四に初地能入の因緣を說くに皆十種の數量を以て說く。故に衆多十因緣と云ふ。因緣とは初地の入心にして、因卽緣の持業釋也。名爲根とは初地の住心なり。淨治是地とは妄執を斷ずるを云ふ。名究竟とは出心なり。淨治地果相とは淨治地は根の句にして、果相は究竟の句なる故に、地之果相にして、第六轉屬聲の別體の依主釋なり。果相は卽所證の理、方便業とは向下利物と、後位に進趣する向上との方便を惣じて云ふなり。合經の中に於て初に治地に合し、後に行者從此の下果相に合す。無量波羅蜜多四攝法とは根の句なり。行者從此等とは信解行地なり。無有待對とは經の無對を釋し、出過

心量とは經の無量を釋す。十心とは次に引く華嚴經の如し。初地果相とは究竟の句なり。

○華嚴云、發十大願已則得利益心、柔耎心、隨順心、寂靜心、調伏心、寂滅心、謙下心、潤澤心、不動心、不濁心、次又成就十種淨諸地法、所謂信、悲、慈、捨、無有疲厭、知諸經論、善解世法、慙愧、及堅固力、供養諸佛依敎修行、復次住是地已善知諸地障、善知地成壞、善知地相果、善知地得修、善知地法清淨、善知地轉行、善知地地處非處、善知地地殊勝智、善知地地不退轉、善知淨治一切菩薩地、乃至轉入如來地、如是等有衆多十心。

三に證成中に於て三あり、初に治地を證し、二に復次住是乃至入如來地は果相を證し、三に如是等有の下廣を讓る。唐譯華嚴經第三十四、淸涼大疏鈔三十四之下に委く釋せり。十大願行者の心を薰習するを以て、利益心等の十心を發起して後に、十行を修する

所依と爲す。然るに此れに二意あり、一には十心を以て通じて十行の所依と爲す。二には十心を以て各別に十行に對するなり。利益心とは拔苦の心、卽大悲心なり。能く衆生損害障を治して悲行を成立す。柔軟心とは與樂の心卽大慈心なり。能く嗔恚障を治して慈行を成ず。隨順心とは衆生の所求に隨順す。卽是れ施心なり。能く、身命財眷戀障を對治す。寂靜心とは寂靜にして世間の名利を求むることなく、而して方に能く諸善功德を求めて厭ふことなし。是れ無疲厭の心なり。能く報恩を求め利養を貪求する、不寂靜障を對治す。調伏心とは戒律を堅守して、能く身口意三業の麁强を調伏す。復能く善巧なき求加行障を治す。寂滅心とは世間に處して世法を行ずと雖、妄惑を生ぜざる心なり、故に寂滅と云ふ。是れ則世間の法を解する心なり。其の性不柔和にして他人に隨順せずして轉寂滅ならざる障を治す。謙下心とは賢善を高崇し、

惡を拒で增長せしめざる故に謙下と云ふ。卽是れ慙愧心なり。放逸高擧障を對治す。潤澤心とは能く堅固に出離の法を勤修して法を以て身心を潤澤し、生死の大苦を斷ずるに於て怯弱を生ずる障を對治す。不動心とは能く如說に修行して、如何なる境遇を感ずるとも動轉せざる心也。諸佛菩薩等の大師に於て疑惑を生ずる障を對治す。不濁心とは卽是れ信行なり。信は心をして澄淨ならしむるを以て性とする故に不濁と云ふ。濁は卽不信なり。未發心、未受戒障を對治す。以上の十心は功德善心にして、次の十種淨諸地法の所依なり。次に淨諸地法の中に於て、信とは前の信如來本行所入乃至信成就果なり。悲と慈とは衆生界に對する拔苦と與樂となり。與樂の究竟は佛果なり。捨とは菩薩是の如き大慈悲の法に隨順して、一切の物に於て貪著する所なく、大施を行ずる卽是れ喜捨の心なり。無有疲厭とは菩薩大慈悲を以て一切衆

生を救度して、疲るることなく、厭ふことなきの心なり。知諸經論とは菩薩外に一切衆生に對して、無疲倦の功德を生ずる故に、自ら内に諸經論等を開解することを得るを云ふ也。善解世法とは此の二利の功德に由て、善く應作不應作を籌量して、其の機の宜きに隨て利益するを云ふ。慙愧とは時を知り、機を知て、内に顧み外に愧て以て自身を莊嚴して、自利利他の道を修するを云ふ。堅固力とは如上の功德善行を精修して、懈怠せざるは是れ精進不退卽是れ堅固力也。供養諸佛依教修行とは是の如くの大堅固力を得て、一切の諸佛を供養し、教に依て修行するは第十の供養諸佛なり。以上の十成就は正く淨治地なり。前の利益心等は治地が所依の法なるを以て、能依に隨て尙治地に屬する也。復次住是の下の十知は卽果相なり。是地とは卽初地なり。善知諸地障とは初地に入る時、觀解に由て障に十箇ありて、十地の功德を障碍するこを知る。之れに依て亦智に十ありて十地の障を治するこを知る也。善知成壞とは行に由て位を成す。卽能く諸行を集むるは成相なり。然るに位の無體なることを解して、自行に住するは卽壞相なり。初地の位に住して之れを知る也。善知地相果とは後得の方便智は帶相觀の最終なる故に相果と云ふ。善知地得修とは十地に得入するは卽根本智也。故に修とは證修にして緣修に非ず。善知地法淸淨とは勝進分の位の後得智を云ふ。根本智の位に地法を淨めて已に淸淨なる故に。善知地轉行とは十地は前地に依て後地を起して、皆相捨する故に。善知地地處非處とは人法二執を非處と云ふ、二空を住處とす。卽相應と不相應と也。善知地地殊勝智とは、後は前に勝れて增長善巧なるを殊勝智と名く。善知地地不退轉とは十地の地地各各方便を具して退轉せざる故に。善知淨治乃至入如來地とは能く諸障を對治し盡して解脫を得る

を知る也。上來三種の十心は皆初地の果相を示す。中に於て利益心等の十心は起行の所依にして因の句なり。次の信悲等の十心は正く淨治地の行にして根の句なり。後の善知の十心は果にして究竟の句なり。今は短の三句に約して初地の位に於て之れを明かすと雖、十地地地皆爾なり。

○若廣分別卽有百萬阿僧祇，度門、故曰無邊智生也、更約前三心作十心說之、若通論信解地則初地爲種子、二地爲牙、三地爲疱、四地爲葉、五地爲華、六地爲果、七地爲受用種子、八地爲無畏依、所謂果中之果、九地爲有進求佛地慧生是最勝心、十地此心決定、此二心無別境界、還是於第八心中約方便轉開出之耳、若一一地中亦自具此十心、且如往初地時成就淨治諸地法及知諸地智慧增長、更解二地以十心類例推之可知、華嚴有衆多十法門、亦當准此次第廣分別說也。

三に別して建立十心無邊智生の後の二句を釋す。中に於て二あり、初に進で無邊智生の句を釋し、後に更約前三の下追て建立十心の句を釋す。故曰無邊智生也とは經に合する也。建立十心の句を釋する中に於て亦二あり。初に正釋、後に華嚴有衆の下更に餘經の廣說を指す。初の中に於て更約等の二句は標、立若通論の下は配釋也。前には經の建立十心を短の三句に約して初地の果相に合し、自下はあらためて長の三句に准じて十心を配釋す、故に更と云ふ。疏の意は經意の多含を示すなり。卽十地を以て世間の種子等の十心次第續生に喩へて十地菩薩任運增長を示すなり。果中果とは前六心の中の第六心は果なり。彼の結實還て種子と爲て、更に第八心無畏の果を生ずる故に果中果と云ふ也。上の疏云く、今此受用果心復成後心種子と。此二心無別等とは九十の二心を釋出する理由を示す也。以上は十心を長の三句に配釋す。若

一一地の下は短の三句に約して配釋す。且如住初地等とは初地に於て前に示す所の十種の淨治諸地と、知諸地相等の十心を具するが如く、初地の智慧次第に增長して此の段に明かす所の種子乃至決定の十心を具足すと言はんとする也。故に如の字は知諸地に止て例如なり。古來知諸地の下に相卽是先解一地竟藉此爲因の十二字脫せりと云ふ說ありと雖、今は取らざる也。

○然此經宗、從初地卽得入金剛寶藏、故華嚴、十地經、一一名言依、阿闍梨所傳皆須作二種釋、一者淺略釋、二者深秘釋、若不達如、是密號、但依文說之、則因緣事相往涉於十住品、若解金剛頂、十六大菩薩生自當證知也。

上來正く十地の相を說く經文を解釋すること畢て、自下の一段は後に十地に於て淺と深との相あることを辨ず。中に於て初に然此經宗乃至剛寶藏と標して故華嚴十地等と淺深の兩釋を列し、後に若不達如の下は釋す。中に於て淺深の差別知るべし。此の一段を釋するに付て指心鈔第十四に光明山朝譽の義、次に西院信證僧正の義、次に寶生御房の義、次に十六支義の說、次に覺心の義の五義を擧げ畢て、更に私解を作て云く、今此の文は伏難を通ずる也。上來華嚴經の十地衆多の十心を引證して今經の十地を釋せり、恐くは顯密雜亂せん歟と。此の妨難を遮せんが爲に然此經宗乃至金剛寶藏と標して顯敎の十地に簡別し、更に無畏三藏の口傳に依て花嚴の十地の名言に於て淺深の二釋を作るなり。中に於て華嚴經の深秘の義を以て今經に同じて作釋す。若し是の如くの密義に達せずして但し彼の經の淺略の文に依て、今經の十地を說かば、今經の菩提心本末の因緣事相が、彼の十住品に往き涉て淺略と成ると云ふなり。往涉とは顯敎の分齊と成ると云ふなり取意。深秘の釋は金剛頂の十六大菩薩生と、今經の十地

と一揆なる旨を顯すなり。本有の菩提心を以て曼荼羅の本體とす。（無點の阿字）八葉を因・行・證・入とす。（有點四阿卽阿阿引暗惡）以て十地を標幟し、十六大生を標幟す。（四智各具四智の故に十六と成る）是れ此の横竪不二の德體たる菩提心實相を以て金剛寶藏と稱す。位に付ては本有無垢の十地と云ふ。卽横平等にして無高下なり。若し修生顯得に約せば機の頓漸に隨て或は横に頓發して初地卽極し、或は竪に漸現して十地分證するを以て、横竪の證各別なりと雖、横に卽して竪、竪を全ふして横なり。之れを稱して修生顯得の十地と云ふ。本有無垢の十地を全ふして修起する所の、修生顯得の十地なるを名けて密號と云ふ。若し此の意を得て華嚴の十地を觀ずれば、彼の行布圓融は卽秘密の横と竪と不二となり、卽亦阿字の卽空卽有卽本不生なり。彼の帝網重重互爲主伴も、四十二地階次不同も皆法身遮那の常恒の說法なり。卽彼れの

果分不可說の境界なり。此れを深秘の釋と云ふ。然るに常途に云ふ所の行布圓融は、未だ我密教の本修不二を顯示せざる故に淺略の分齊なり。若解金剛乃至當證知也は金剛頂の十六大生を了解せば、自ら大日經宗の深秘の十地の行相は證知すべしと云ふ意なり。卽金剛頂經の人法一致の深旨顯れ易き法相を以て、而して今經の十地も亦然なりと示すなり。十六大菩薩は曼荼の聖衆なれば人なり。之れを以て行人の地位とすれば法なり。故に人法一致なり。今も亦十地は行人の地位なる故に法なり。亦十波羅蜜菩薩なる故に人なり。若し本有に約すれば分滿不二、生佛平等にして異論なしと雖、修生の位に約せば修位に在て本有菩提心に安住するを金剛薩埵の位とす。菩提心論の法爾應住普賢大菩提心なり。能住は初地金剛薩埵、所住は本有性德の三十七尊住心城なり。初地は證の位なるを以て現世證得歡喜地と云ふ。而して十

地十六生對接すれば金薩埵初地なること分明なり。之れを以て正旨と爲す。然るに此の尊は修位にあるを以て總德にあらず。（本有は總德なり）又初地以上に五轉の次第あるが如く、地前三劫の相似比觀亦五轉の次第あり。然るに發心修行は皆金剛薩埵の德なる故に、兼ては地前に金薩埵を置く。不空心要に金剛薩埵見惑未除と釋する之れを述する也。故に金薩埵に兼正を存置して偏執す可らず。即菩提心論の纔見と常見とにして、纔見は金薩地前の智分なり。又十六生を以て長に十地に配するは金剛三昧經の如し。（亦名清淨金剛經）短に配するは仁王陀羅尼秘釋なり。此の二併せ取て初て正傳を得と稱すべし。

十地十六大菩薩生の配合に付て東聞記第一云く、古上人兩界愚案鈔云、問十六大菩薩如何可配十地乎、答假令配之者以薩王愛喜配初地、寶菩薩第二離垢地寶明徹無微細垢故也、光菩薩第三發光地、幢菩薩第四焰慧地、幢上珠發光故也、唉菩薩第五難勝地、論云眞俗兩智行相相互違合令相應故唉也、法利二菩薩第六現前地也最勝般若令現前故也、因語二菩薩第七遠行地也、是出過二乘道故、此菩薩斷二乘僻見故也、業護二菩薩第八不動地也、相用煩惱不能動故也、被甲冑不動四魔故歟、牙菩薩第九善慧地、成就微妙四無碍辨依牙齒也、拳菩薩第十法雲地充滿法身故、此拳持三密故也と、私云く兩界愚案鈔と稱する書は全集に見えざる也。又一義云く、因句初地、薩王愛喜根句二地、寶三地、光四地五地、幢六地七地、唉八地、法利九地、因語十地、業護牙拳と。即十六大生を以て三句十地に配當する也。此義の意の云く、金薩は十界平等の菩提心常住堅固不退不動の故に、王は生佛平等の極際に住して能く諸法に於て自在主と成る、故に王と稱す。愛は諸衆生を觀ずること己身の如く、一子の慈悲を垂れて衆生を愍念する故に愛と云ふ。喜は本有菩提

心を開發して大歡喜を生ずる故に喜と云ふ。右は東方發心門の四親近なる故に初地因句に配す。第二地を離垢地と名く、寶體明淨にして無垢なる故に寶菩薩に配す。第三地を發光と云ふ、故に光菩薩に配す。寶は菩提心の性に萬德を具する義、光は淨心の光明也。第四地を焰慧地と云ふ、幢上の珠の光に配す。第五地を難勝地と云ふ、三昧成就して眞俗二諦の邊を超越するを以て幢の高出に配す。故に四五の二地を幢菩薩に配す。第六地を現前地と云ふ、般若現前する故に歡笑すべし。第七地を遠行地と云ふ、方便滿足して二乘の空を遠離し、物を雨らして衆生を救ふ故に、衆生も歡笑し、自も亦笑ふ故に。六七の二地を笑菩薩に配す。以上を以て根句とす。第八地は色自在地の故に普現色身の觀音に配す。觀音卽法菩薩なり。亦第八地を不動地と云ふ、純無漏相續にして煩惱の爲に動搖せられざる故に。利菩薩卽文殊の智劍能く戲論を斫るに配す。故に第八地は法利の二菩薩に配する也。第九地は心自在を得て四無碍智を以て善く說法して法輪を轉ずる故に、轉法輪智の因菩薩に配す。語菩薩は外用の言語を主る故に、因は內證、語は外用なり。故に此の二尊を以て第九地に配す。第十法雲地は業菩薩は二利の事業を主る故に、護菩薩は如來の十力四無所畏の法を觀察す。無畏は卽護の義なり。牙菩薩は大法を演說して一切の魔を摧伏する故に。拳菩薩は能く諸佛の智法海を執持する故に。北方の四親近を以て第十地に配する也。而して八.九.十の三地を以て究竟句と爲すと。

○經云、我一切諸有所說皆依此而得者、如上一切智地無盡莊嚴境界、及餘無量修多羅佛所稱歎一切行果、無不因此得之、是故餘經如是廣歎娑羅樹王莖葉華果、今此經中唯明此樹王種子及生育因緣、若離此因緣能成彼果者無有是處、所以稱大日

經王ト者非ス爲ル此カ乎。

十地段の經文を釋するに大に二段ある中、上來は第一に十地の相を釋すること畢て、自下第二に成佛等の因緣と成る勝相を明かす經文を釋す。中に於て二あり、初に直に解し、後に是故餘經の下餘經と對比す。初の中に於て標文作釋知るべし、此の經文は十地は第十一地の身相と說法とを生ずる因緣にして、其の勝れたる相を明かす也。我とは大日尊の自稱にして能說の敎主なり。而して此の我の一字に於て總じて本地加持の身相を攝す。一切所有所說とは次に說法を明かす。一切の言、廣きを以て總じて顯密一切の所說を攝す。疏に釋して無盡莊嚴境界と云ふは、通じて本地加持に亘る。及餘無量等とは、及餘の言の顯はす所應化所說の顯敎の無量の契經也。而して三句十地の法門を超出せざるを以て、此の大日經王の所流所目なり。一切行業とは即佛所說の行果

也。餘の顯敎に由る故に其の因を云はず。又果中に自ら三身を具するを以て、別に其の能說の身相を言はざる也。是故餘敎等とは、種子は唯能生にして果は唯所成也。行は能所成に涉る。因に望むれば所生也と雖、果に對すれば能成なり。故に餘經には所成の行果を縱して今經は能成の行因を奪ふ。此れを種子生育因緣と云ふ。餘敎に能生の菩提心を縱へざることは、表德實相の菩提心を說かざる故に。能成の行を許さゞることは彼れは船筏の如くにして、全く究竟の果體と成るべき三密の行體にあらざる故に、唯我法の中には菩提心を因とす。卽阿字を體とす、大悲を根とす。阿婆羅訶佉の五字是れ根なり。各各五點を具して以て萬行とす、卽緣なり。此の種子と生育の因緣とは我密敎不共の所談にして、敢て餘經に說かざる所なるを以て唯明と云ふ也。此れ因陀羅王と稱する所以なり。又行果に付て約言すれば、顯の行は所生にして

顯の果は所成なり。密の菩提心は能生にして密の三密の行は能成なり。一義云く、行之果の依主釋の意にして取る所は果にあり。下に能成彼果と云ふを以て知るべしと。古來餘經とは大日經に對して金剛頂經を指すと立つる義ありと雖、兩部は本來不二なり。故に胎を說くに金を攝せざるなく。金を擧ぐるに胎を收めざるなし。故に相對して辨ずべきにあらざる也。

○經復擧益勸修云、是故智者當思惟此、一切智信解地、復越一劫、昇住此地。

三劫段の經疏に於て大に三節に分つ、謂く三劫と十地と擧益勸修となり。自下は第三に擧益勸修を明かす經文を釋す。中に於て二段あり。初に章を標して經を牒す。經復擧益勸修云の七字は標章なり。經文は有相劣慧の機に約して二重に益を明かす。隨て智者に二類あり、一は十地の行者也、十地の行を修して佛果の益を得るが故に。二は三劫の行者也、三劫の行を修して十地の益を得る故に。經は逆次に作文して此一切智信解地と云ふ。相違に文を讀むべき也。此は目近の語なる故に上の信解地を指して其の果を取る。復越一劫昇住此地とは是則地前三劫の行に由て得る所の益を擧ぐ。復とは初二劫に相對す。三妄執の一卽第三の極細妄執を一劫と云ふ。然るに疏は其の得益に就て釋する故に名度三大阿僧祇劫と云ふ。經は巧便に斷惑の分齊を顯はして一劫と云ふ。第三劫能越の心は第八、第九の二心にして極細妄執を斷じて初地に入住するを以て也。若唯擧益のみならば惣じて三妄を擧げて宗家の釋の如く越三妄執、越三阿僧祇劫、是則十地究竟と云ふべき也。昇住此地とは惣じて信解地を指し、此地と云ひ別して初地を指す。

○卽是初入此信解地、是復越百六十心一重細惑名度三大阿僧

祇劫也。

後に作釋中に亦二あり、初に三劫の得益を明かす經を釋し、後に就前三句の下、十地の得益を明かす文を釋す。初の中に亦二あり、此れは初に略釋也。卽是初入此信解地とは昇住此地の句を釋す。三劫の行を修して十地の益を得る故に、得益は寬く、十地に通ずべし。故に宗家は是則十地究竟也と釋し、疏も初入此と云ふて入此初と釋せざる也。故に其の益初地に局らざることは兩祖一揆なり。然れども初に入る位は初地なり。是復越百等とは復越一劫の句を釋する也。

○行者初觀空性時、覺一切法皆入心之實際、下不見衆生可度、上不見諸佛可求、爾時萬行休息謂爲究竟、若住此者卽退不墮二乘地、不進得上菩薩地名爲法愛生、亦名無記心、然以菩提心勢力及如來加持力、復能發起悲願、爾時十方諸佛同時現前而勸

喩之、以蒙佛教授故轉生極無自性心、乃至心之實際亦不可得、雖解脫一切業煩惱而業煩惱具存、至此不思議地乃名眞離二乘地也。

後に廣く釋して能越の心と所越の心とを明かす、中に於て三あり、一に所越の第八空性を釋し、二に然以菩提の下正越の第九極無心の轉生を釋す。三に雖解脫一の下、已越の第十秘密莊嚴心を明かす。一の中に初に沈空の相を明かし、後に若住此者の下沈空の過相を明かす。行者初觀とは能寄の第九心の人を呼で行者と云ふ。行者の言は卽次下の心之實際不可得迄を管す。而して此の第九心の行者が還て曾て第八心にありし時を指して初觀と云ふ。經の所謂空性無相無境界なり。之れを心之實際と云ふ。之れを以て菩薩の難處とす。何となれば沈空するを以て也。是れ有相劣慧の眞言行人方に初地の入心に居して、遮情に耽て留滯し易き

を以て、能擬として以て顯教の七地沈空に擬し、此が能超の極無心を以て則八地の能驚覺觀自在者の大悲蓮花三昧に擬す。五秘密經及び智度論第十、第十五には七地沈空を說く。又入楞伽經晉譯花嚴經第二十七、唐譯華嚴經第三十八には八地沈空と說く。然るに第七地の勝進分は第八地の加行道なる故に敢て相違にはあらず。重譽、覺心等は今の疏に規て本經を解釋するに、地上二劫の法相を以てするは疏家、宗家の本意にあらざる故に不可なり。覺滿、道範、賴瑜、聖憲等の師、地前三劫を成立するは兩祖の所判にして宗の正義なり。然るに所寄の顯教に在ては、地上二劫なれば常途に擬宜して且く沈空驚覺の說を爲す。此れ教道門なり。教道門と云ふは義門頗る寬くして、所擬の顯人を教誘して入密せしむるにありて、能擬の密人に對して所須あるに非ず。又高祖は漢土日本の流布に就て八・九の二心を以て所寄の顯教卽天台華嚴

の兩宗と判ずれども、疏家は專ら印度流布に就くを以て八・九二心を直に能寄の眞言行人と爲り、故に此の段沈空驚覺の釋の如きは、他の顯教の教說の儀式に擬准して釋を爲る也。此れ寄齊門の外に准擬の一門を立つる所以なり。今經の法相を以て、或は一乘に擬し、或は三乘に擬し、或は人天乘に例して示すこと一准ならず。又法華に擬するも必しも宗家の第八住心（天台）にあらず、華嚴に准ずるも必しも宗家の第九住心にあらず。而して疏家は八・九二心を以て直に眞言行者と爲す。故に第八心は初地の能入にして初法明門なり、何ぞ沈空あらん。已に沈空なし、誰が爲に驚覺を須ひん。實に法明道の位に於て沈空の義なしと雖、沈空に相似て類することなきにあらず。謂く有相劣慧の行人地前遮情の究極する所なるを以て、空寂に沈て上求下化の念を失するに似たる儀あり。之れを以て能擬として彼の七地沈空に准ずるなり。驚

覺に二あり、心外の驚覺と、心佛の策勵となり。眞言行者第八心の位に心外の驚覺あるにあらずと雖、心佛の策勵はなかる可らず。心佛とは自身本有の淨菩提心の曼荼羅本薫冥助なり。若し此の本有の曼荼の內薫を具せざれば何れの時にか曼荼海會に流入せん。故に此の心佛の策勵を以て能擬として、彼の八地の三昧道に擬するなり。若し直往の眞言行者には絕て驚覺なしと云はゞ初心の行者をして觀佛金剛起を行ぜしめ、又五相成身觀を修せしむるは頗る無用に似たり、如何。若し高祖に約すれば空中諸佛の驚覺は從顯入密の常則なり。然りと雖、七地沈空は一乘の教義にあらざるを以て、亦三乘に擬して驚覺する也。法愛生とは心實際の法に於て愛を生じて滯著するの義。無記心とは唯一切法不二平等と悟り、心實際の空性に住して總ての分別を休するを以て名く。金剛頂經に無識身三昧と云ふ卽此れ也。然以の下正越の

第九心を釋する中に於て二あり、初に略釋、自身の菩提心內薫力と、外十方諸佛加持力とに依て、進で上求下化の悲願を發起することを明かす。以の字は事の第五轉也。後に爾時十方の下具に釋す。中に於て初に諸佛勸喩、後に轉生極無自性心生とは行者の轉進を明かす。爾時十方等とは疏に隨て經文を解釋すれば、經の所謂空性乃至鼻舌身意は是れ心實際所驚覺の文なり。唯最終の極無自性心の一句を能驚覺とす。一人續生の沈と浮とを以て三乘教の十地の第七地と、第八地とに擬准して釋す。若し宗家に依て經文を解釋すれば所寄齊なる故に。所謂空性乃至鼻舌身意の文を兩讀すべし。第一讀は第八心の心實際、第二讀は第九心の自分の所驚覺の文なり。文は同じと雖、義に於て淺深不同なり。何となれば第三劫の未極と正極と異あるを以ての故に。後の極無自性心生の一句は第九心已極の勝進分にして尙第九心の攝在なり。疏

家は能寄齊に約して釋する故に第九心に於て自分勝進の二分を見ず。宗家は所寄齊に約して釋する故に第九心に於て自分と勝進との二分を立て給ふ也。乃至とは前の下の衆生と上の諸佛とを乃至す、卽十法界なり。意は十法界も不可得なり、乃し自心の實際に至る迄亦不可得なりと遮遣す。第八心の位は一切諸相悉く自心の實際に歸して空寂なりと證す。故に萬行休息す。然れども其の心の實際を空することなし。今は極無心生して自心の實際をも遮遣す。卽前の疏に心實際亦復不可得と釋するに同なり。已越の第十莊嚴心を釋するに初地の入心に於て、第八の空性心は極細妄執の前半を越え、第九の極無心は其の後半を越え、卽遮情の故に、雖解脫一切業煩惱と云ふ。而業煩惱具存の不思議地は初地の住心にして極細妄執已越の位なり。蓮華の開敷と(第八・第九)果復成種と不同也。第八の心實際も亦復不可得と爲りて、第九の極無心は極めて解脫すと雖、遮情の極處にして表德の實義未だ顯はれざるを以て、敷花に喩ふ。今の疏に經に合して雖解脫一切業煩惱と云ふ也。第十莊嚴心に至て表德方に顯はるゝを以て果種に喩へ、經の而業煩惱具依に合す。德具にして無非佛事なれば不思議地と云ふ。眞離二乘地とは第三劫を出過すと雖、尙二乘と同く地前相似の位に在るを簡て、眞離と云ふ也。具存に就て玉振鈔云く、經に具依と云ふは業煩惱に於て毫も餘すことなく洩すことなく、具足して菩提心に依り住するの義なり。所依の義にあらず。故に所依に簡で具存と云ふ。疏家は表德圓具に約して初地表德の文とす。宗家の微細妄執未斷の義と同じからず。宗家は之れに就て五處驚覺の隨一として第九極無心の證として縛具とす。經意多含なり取意。

○就前三句義中更開佛地爲上上方便心至此第四心時名究竟

一切智地、故曰ニ此四分之一度於信解一也。

後に十地の益を明かす經文を釋す。中にをいて釋義と、合經と知るべし。此の經文に就て疏家の意は信解行地觀察三心の經文に著眼して、信解行地の中に於て因を下方便とし、根を中方便とし、究竟を上方便とす。八地以上は境界皆同なる故に合して上方便とす。然るに因中の究竟なれば單の上にして上之上にあらざるを以て、別に更に第十一地を開說して上上方便として、十地卽信解地の十喩の觀門を以て所度として、度於信解と云ふ。前前の十喩の觀を後後に望むれば、戲論と成るの義門に約して、法門の戲論を以て第四の微細の惑とする故に、四分之一を以て能度の淨心卽上上方便心とす。故に此四分之一を信解於度すと讀むべき也。然るに宗家の秘藏記云く、越三妄執、越三阿僧祇劫、卽是十地究竟也、過此修上上方便、心斷微細妄執至佛果、故經曰此四分之一度

於信解と。高祖の意は所度の妄執を以て三劫及び微細の四分として微細妄執を以て之一と云ふ。此の根本無明の微細妄執の作用を十個に分て十地に於て之を斷じ、佛果の解脫道に於て其體を斷盡す。然るに經に信解に度すと云ふは、且く其因位所斷の作用に果智斷の體を攝して度於信解と云ふ。功用を假らずして體自ら亡するを以て也。又擧益に就くが故に三劫の果を十地と指して、十地究竟と云ふ。其の能斷の智品に十地の差別なる故に十地各各に此れを過ぎて、（二地は初地を過ぐる等）各各に上上方便を修す。（初地の方便に對して二地の方便を上上とす）各各に微細妄執を斷じて佛果に至る、故に各各の字を加へて讀む時は、宗家の意愈明かなり。信解を以て能斷の淨心と爲す。故に四分之一於信解仁度すと讀むべき也。經文多含なり、一概なる可らず。以上十地段終る。

大毗盧遮耶成佛經疏卷第三沙門一行阿闍梨記

入眞言門住心品第一之餘

○經云爾時執金剛秘密主白佛言、世尊願救世者演說心相、菩薩有幾種得無畏處、乃至當得一切法自性平等無畏者。

九句の廣說段の如來の答說に於て六段あり、第一に偈を以て略して四問を答へ、第二に秘密主無始生死の下具に續生の句を答へ、第三に爾時金剛手復請佛言の下、諸心相の句を答へ、第四に秘密主一二三の下、心相と心殊異とを答へて三劫十地を明かし、第五に爾時執金剛の下重て心相を答へて六無畏を明かし、第六に秘密主若眞言門の下、修行の句を答へて十喩を明かす。自下は第五に六無畏を明かす經文を釋す。中に於て牒經と作釋との二知るべし。乃至とは如是說已乃至此空智生の七行餘の經文を攝す。演說心相とは能寄齊の眞言行人の淨菩提心の相なり。

○猶是答前心相句、以金剛手既聞此教諸菩薩直乘眞言門上菩薩地故、問世尊此菩薩行道時有幾種得無畏處佛還復約前三劫作差降對明也。

後に作釋の中に於て猶是答前心相句の七字は前問に屬當す。以金剛手の下文に隨て釋す。中に於て二あり、初に金剛手重請の文を釋し、後に佛言秘密主の下如來答說の文を釋す。初の中に亦二あり、初に略して問答の意を解し、後に梵言阿濕の下別して無畏を釋す。猶是の猶の言は前の六十心三劫に對す。卽猶似にして似て全同にあらざることを顯す。何となれば六十心は所離の妄心、六無畏は能離の蘇息處、三劫は前後相望して前に望むれば淨心なりと雖、後に對すれば深心と成る。其の義心續生に涉る故に疏家三劫を總結して諸佛大秘密と合す。然るに六無畏は行者の上轉進趣に際して蘇息を以て本旨とすれば、經の顯文唯蘇息の相

の差降のみにして續生の義隱れたり。故に宗家は引證し給はざれども、前位に休息するは後心に進まん爲なり。故に修生の淺深三劫と同く、所寄齊の顯敎に擬して續生の義に涉る。故に心續生の義は廣く八心・三劫・十地・六無畏に通涉す。而るに尙ほ六十心に通ぜず。心相は最廣にして染淨該通せざるなし。故に當品の疏の最尾に總結して、已說淨菩提心諸心相竟と釋するなり。又九句の問起は純ら密人に約する故に答說隨て亦唯密人に約する也。然るに初二劫と前五無畏とは文面顯敎に約することは、眞言行人の續生の心品幽邃にして輒く修生淺深の相知る可らざる故に、顯敎の斷證に寄せて之を顯す。文底の意は眞言行者にあり。故に心相心續生等專ら密人に約することを解すべき也。以金剛手乃至菩薩地故とは廣く諸文を指すべし。題に入眞言門住心品と云ひ、又第三劫の標には復次秘密主眞言門修行菩薩行等といふ。其

の正釋に依れば地前三劫の間の修行なり。又意初地以上の眞言行をも兼ねたり。又復越一劫昇住此地は卽初の擧益なり。金剛手此等の說を聞て其の中間に於て蘇息する所なくんばある可らず。然るに未だ之れを聞かざる故に、更に問起する也。問世尊此乃至得無畏處とは、菩薩行道は大小二機の中には小機の有相劣慧三劫十地分證の人に約す。蘇息を得る故に頓悟の人にあらず。甚深無相法劣慧所不堪爲度彼等故兼存有相說の劣慧の機に被むる所なり。佛還復約等とは三劫は斷惑を旨とし、六無畏は證理を本とする故に義門に於て差異ありと雖、其の法體に於ては寬狹なき義を顯して復約前三劫と云ふ。然るに文に就ては三劫の惣標に越世間三妄執出世間心生と云ふは別意あり、謂く八心段の經文は離於斷常に限て之に寄齊する密人も、尙生死を隔つ。善身の二無畏も一生成佛にあらず。故に出世間の心に約して第四住

心を三劫の初とす。即聲聞見道の位なり。此れに寄齊して以て一生成佛決定の最初發心を顯す。何となれば聲聞の法見道を證する人は必ず無學果を成ずる故に。然りと雖、順世の八心も積て方便加行と成て、此の出世間の發生を成立すれば此れが加行道なるを以て、亦初劫の分齊に攝する也。作差降對明とは六種の階降の次位證悟の不同を差降と云ふ。即三劫中に於て六種階降の差別を作す也。對明とは對は前後相對なり。又六無畏は初四は初劫、第五は第二劫、第六は第三劫なる故に初を開て後を合す。三劫は初を合して後を開く、十住心は總開なり。

○梵音、阿濕縛者、正譯當言蘇息也、如人爲强力者所持扼喉閉氣垂將悶絶忽蒙放捨還復得蘇衆生亦復如是、爲妄想業煩惱所纏觸緣皆閉至此六處如得再生故名蘇息處亦如度險惡道時其心泰然無所畏懼故名無畏處也。

後に別して無畏を釋す。中に於て二あり、初に正譯を釋し、後に亦如度險の下今の義翻を釋す。初の中に於て初に梵言を翻じ、後に如人爲强の下釋義なり。中に於て開譬と合法と知るべし。蘇息の名は喩に約す、故に次に喩を擧げて義を釋する也。義翻の無畏處も亦喩に約して名くる也。險惡道とは三妄執に比する也。

○佛言秘密主彼愚童凡夫修諸善法害不善法當得善無畏者、善義通於淺深、今此中意明十善業道如世人以十不善道因緣漂沈惡趣無有窮已後得順世八心也漸受三歸戒於無量世生人天中後至涅槃以免離三途劇苦名取初蘇息處也若眞言行者初入三昧耶依三密供養修行位與此齊等也。

後に如來答說の經文を釋す。中に於て二あり、初に別して六無畏の文を釋し、後に然此心在の下無相の淨心を以て相に寄せて明かす所由を辨ず。初の中に自ら六段あり、第一に善無畏を釋す。牒

文作釋知るべし。愚童凡夫とは世間三箇の心の通名なれども今は第二第三の心を取る。作釋の中に亦二あり、初に文相を釋し、後に若眞言行の下、疏主寄齊を明かす。初の中に於て三あり。一に修諸善法の句を、釋す。二に如世人以の下不善法を釋し、三に後得順世の下別して害の字を釋して名を結す。善義通於淺深とは凡そ善惡待對する時は善の義は寬し。六無畏皆善ならざるはなし。故に通於淺深と云ふ。而るに此の中には世間の十善を取て善と名くる故に今此中等と釋す。後得順世八心は標、漸受の下は釋也。也の字は又の俗語にして標釋を隔別すれども無き本を可とす。經の八心の名は唯外の世間に約すれども經意は內外に通ずるを以て受三歸と釋す。於無量世生人天中に付て有部は一業一生を引くと立つと雖、大乘の實義は敢て有部に同ずるにあらず。小乘尙一興供養千反生天後證涅槃の說あり、況んや大乘の實談をや、

怪む可らず。又生人天中は華報後證、涅槃は果報なり。三途とは玄應音義第四云く、俗書春秋有三途危險之處、借此爲名と。春秋は左傳昭公四年に出づ。翻譯名義集第二云く、按四解脫經地獄名火途、餓鬼名刀途、畜生名血途と。初入三昧耶とは禪林寺靜遍の傳には五種三昧道の中には、第一の遙見曼荼、第二の結緣入壇一印一明を授くる位とす。東寺杲寶は第三の三昧道受明灌頂の位とす。五種三昧道は大日經第五秘密曼荼羅品に說き、疏第十五に委く釋せり。

○經云、若如實知我當得身無畏者、如修循身觀時、見此身三十六物之所集成五種不淨惡露充滿、終不爲此而生貪愛、次復觀受心法得離不觀我性四種顚倒、於身諸扼縛得蘇息處、若眞言行者本尊三昧、衆相現前時、位與之齊也。

第二に身無畏を釋す、牒文釋義知るべし。如實知我とは實の如く

貪愛を捨離して自己の護るべきを知るを知我と云ふ。第三無我無畏の我の自性畢竟空を知るに同じからざる也。何となれば第二第三の住心は八心に通渉す。中に於て第六心に至る迄を以て第二の住心とし、第七心以去を以て第三の住心と爲すことは宗家略論の引證異求す可らず。今此の初二の無畏も其の趣き大同少異なり。其の少異の邊は住心の本旨は人天乘にあり。故に第二の住心を以て人乘とし、第三の住心を以て天乘とす。無畏の要點は難處を脱するにあり。善と不善と相對して十不善業を脱する處に初無畏を立つ。故に第八心の位に初無畏を立つ。外に約すれば人の全分と六欲天となり。故に疏に人天と云ひ、順世八心と釋す。又散善と定善と相對して初禪以上に於て修する所の定善は散善の難處を脱する故に、第九の殊勝、第十の決定の二心の位に身無畏を立つ。故に今知我と云ふと雖、無我の理を知るにあらざ

ることを解す可き也。若し內道に約すれば未だ順解脫分の善根を生ぜざると、已に之れを生ずるとの別を以て初二の無畏を分つべし。又解脫分の善は內の方便なりと雖、順世の攝なる故に尙世間の三昧なり。身無畏の身の字は所觀の身受心法の四境に通ずる惣稱にして、身之無畏の第六轉屬聲の依主釋なり。何となれば身とは四念住の觀を云ふ。卽所觀の境を以て能觀の心に名く、此の觀に依て無畏を得る故に能觀に相從して立名す。善無畏も之れに准じて釋すべし。修循身觀とは疏は內道に約して釋す。循身觀とは四念住の中の身念住の觀を云ふ。若外に約すれば苦・麁・障・靜・妙・離の厭下欣上の六行觀なるべし。華嚴音義第二云く、循は巡也と。身の支分に於て頭頂より足に至る迄次第に巡り歷て、皆悉く不淨と觀ずる故に循身觀と名くる也。三十六物と、五種不淨とは指心鈔第十五廣く諸文を引證せり。而して三十六物は五種

不淨の中の自體不淨の中にあり。卽吾人の自體は髮毛爪齒皮肉等の三十六物共成の故に不淨なり。惡露とは涎唾二便等を云ふ。次復觀受心法等とは受は苦なり、心は無常なり、法は無我なりと觀ず。之に依て淨・樂・我・常の四顚倒を離る、故に得離四種顚倒と云ふ。然るに不觀我性の四字此處に在ては解す可らず。玉振鈔の意に由て次の能寄齊の段の衆相現前時の下に廻文すべし。於身諸扼縛とは身の諸の扼縛を離るに於て也。若眞言行の下能寄齊を明かす、卽三密の加持力に由て海會現前の影像の佛身を衆相現前と云ふ。加持界に於て本尊三昧の衆相現前する時に之れを觀じて我の自性ありと認むれば、愛著を生ずる故に三昧を退失する故に、不觀我性と云ふ。又身無畏には所寄に貪愛を遮し、能寄に我を遣る。次の無我無畏には所寄に我を遮し、能寄に愛を捨す、彼此影略互顯なり。

○經云、若於取蘊所集我身捨自色像、觀當得無我無畏者、謂觀唯蘊無我、時於陰界入中種種分拆推求我不可得、捨此自色像者譬如因樹則有樹影現若無樹者影由何生、今五蘊尙從緣生都無自性、何況此積集中而有我耶、如上所說乃至證淸寂之心離一切過、是於我之扼縛得蘇息處、若眞言行者於瑜伽境界一切分段中能觀心不可得、不生愛慢位與此齊也。

第三に無我無畏を釋す。標文作釋知るべし。取蘊とは煩惱は能く生死の苦果を取るを以て取と名く。蘊とは聚集の義にして卽五蘊を云ふ。俱舍論第一に依るに、蘊從取生故名取蘊、如草糠火とは因に從て名く、卽事の第五轉所從聲に得名す、或蘊屬取故名取蘊、如帝王臣とは、所屬に從て名く、卽ち第六轉所屬聲なり。或蘊生取故名取蘊、如花果樹とは、果に從て名く、卽第二轉の業聲なり。三義併ら別體の依主釋に得名す。色・受・想・行・識の假に聚るを身と名く

卽聚集の義なり。而るに未だ我を執せざれば五蘊身、已に我と執すれば我身なり。於の字は境の第七轉にして我身以上は觀境なり。捨自色像以下は能觀なり。自色像とは自身の色蘊を自色と云ふ。五蘊の中色の一を擧げて餘の四を顯すなり。像とは自身の五蘊の上に現ずる所の常一の我に似たる相を像と云ふ、卽影像なり。凡夫外道は此の似我の影像を執して眞我と誤認す。今之れを捨て觀ずるは卽人無我觀なり。此の觀に由て得る所の無畏なる故に無我無畏と名くる也。後に謂觀唯蘊の下作釋中に亦二あり、初に文を解し、後に若眞言行者の下寄齊を明かす。初の中に亦復二あり、初に初の三句を釋し、後に如上所說の下當得無我等の後の一句を釋す。初の中に於て、初に三句通じて釋し、捨此自色の下別して第三句を釋す。譬合知るべし。標するには謂觀唯蘊無我等と述して唯蘊のみを留て我を遮すと雖、釋には於陰界入中種種

分拆等と釋して拆空觀を明かして、蘊も亦破拆す。三科の諸法は因緣合成の法にして其の體過失なるにあらずと雖、分分に破拆するは我執を破せんが爲めなり。大凡そ觀行に於て敎門と同なると、敎門を超過するとの二あり。唯蘊無我の觀は敎門に法有我無と立つると異らざる觀なり。今の標は之れに約す。而して我無を成ぜん爲に更に三科の諸法に於て、分分に破拆して拆空觀を修するは、其の觀敎門を超越せり。薩婆多に於て敎門には麁細俱實と成立すと雖、觀門の極微は假相の觀なる故に假と立つるが如し。以て知るべし、如上所說等とは經の三劫段の初の謂如是解唯蘊無我乃至離一切過の文を指す。一切分段とは本尊の海會現前の種種差別の相を分段と云ふ。卽分分段段の義なり。靑黃赤白等、方圓三角等なり。能寄の眞言行人に約して云へば、第二の無畏は一分の人空。第三の無畏は全分の人空を以て差別と爲す也。觀

心不可得とは前の無畏は所觀の身受心法に於て不淨なり、苦なり、無常なり、無我なりと觀じて、四顚倒を脫すと雖、未だ其の能觀の心を空せず。然るに此の無畏は唯所觀の瑜伽の境界のみならず、其能觀の心も不可得と觀ずる也。不生愛慢位等とは、第二の無畏の位に在る能寄の眞言行者は、一尊の瑜伽を得て漸く我物必見の見解を生ぜざれども尙一尊に保んじて愛慢を生じて餘尊の三昧を得ず。又設ひ普門の瑜伽を修すると雖、唯一法界のみを得て餘の法界にあらず。此れを有相の三昧現前と云ふ。第三の無畏は然らず、專ら菩提心觀を修して心の不可得に安住する故に、設ひ一尊の瑜伽を得るとも亦愛慢を離る。況や普門の瑜伽に於てをや。此の位に於て初に普賢大菩提心に安住して一生成佛の種姓を決定する故に然なり。

○經云、若害蘊住法攀緣當得法無畏者、謂行者心住蘊中欲令發起離著、爾時幻燄等喩觀察諸蘊卽空得離違順八心證寂然界、然離蘊之扼縛於法得蘇息處、法謂十緣生句也、若眞言行者現覺瑜伽境界皆如鏡像水月無性無生時位與此齊也。

第四に法無畏を釋す。標文作釋前に准して知るべし。住法攀緣とは攀は字書に依るに下よりたすけて上へ援き上ぐるの義なり。卽險しき岩石に上るに鐵鎖の助けに依るが如し。蘊を心外に置て十緣生句の觀を爲して、一重の法倒を斷ずる消息を示して、攀緣と云ふ。其の觀の拙なるを顯はす也。十喩觀に由て無畏を得る故に法無畏と名く。又此の十喩の觀後の法無我無畏に望むれば、還て所對治の戲論と成る。故に攀緣と云ふ。卽十喩の法復戲論と成るべしと顯はす也。爾時幻燄等とは三劫段の經疏に准ずれば聚沫と、浮泡と、芭蕉と、陽炎と、幻との五喩に於て、逆次に幻燄を擧ぐるに似たりと雖、今疏明かに十緣生句と云ふ。故に十喩の中順

に幻燄の二を擧げて餘の八を等取すること明かなり。案ずるに疏家惣じて幻等の喩を出すに付て大に二意あり。一には十喩の出沒に由て教の勝劣を辨ず、三劫段の如きは此れなり。二には必ずしも數の多少に拘らず、設ひ一の幻と雖、能觀の行者の作意の別に隨て淺深を論ず、三種幻の如き、又疏第七に若以十緣生句觀諸蘊無性無生、卽是菩薩三昧と釋すると、今疏とは此れ也。於法得蘇息處とは凡そ六無畏は、皆能害の法に依て無畏を得る故に何れも善を法體とする故に、六無畏一轍にして差異なき也。於法の字は依の第七轉、卽所依の聲なり。此の法無畏は卽寂然界にして此の位に住する人は卽寂然界の阿闍梨なるは論なし。但し十住心に攝する乎否に付て、疏家と宗家と其の旨不同なり。經は迂廻の機の一人の轉昇に寄齊して世流布の宗に約するに非ることは明かなり。疏家は隨文作釋なれば專ら迂廻の機に約して、

而も一切の教門を統攝す。然れども亦世流布の宗にあらず。楞伽、深密、勝鬘、寶性、佛性論等を引くが如きも、亦教門に約して世流布の宗にあらず。寂然界の如きは定れる宗旨の相承あるにあらざれども、諸經に瀰淪して緣生無生無性を說く。故に經疏に於ては專ら大綱として毛目とするの意にあらず。是を以て一種の法無畏處一箇の阿闍梨と立つ。故に十住心に對して攝不攝を論ずべきにあらず。宗家は然らず、顯密對辨を本として世流布師承の宗中に於て、獨步、無畏なるを立てゝ秘密神通乘とす。而るに寂然界は教門多しと雖、宗承する人なし、誰れに對してか辨斥せん。故に疏家は大綱とし、宗家は以て所攝の毛目とし給ふ。其の別察知すべき也。故に兩祖の意旨を混ず可らず。而して光明山の教相鈔に寂然界を以て第五住心の攝と釋するは佳なり。若眞言行者等とは瑜伽の境界に於て、第三の無畏は能觀の心を遮し、第四の無畏

は所觀の境界を遣るを別とす。

○經云、若害法住無緣當得法無我無畏者、卽是無緣乘心觀察法無我性、於心外有無影像智都無所得、心王自在覺本不生得離法之扼縛、於法無我得蘇息處、若眞言行者於瑜伽道中心得自在用時、位與之齊也。

第五に法無我無畏を釋す。中に於て標文作釋等前の如く知るべし。害法の法は第四の無畏所觀の十緣生句なり。何となれば前の觀門の法を以て後位に望むれば戲論と成るを以てなり。害と無緣とは第六住心の體法空の觀なり。寂然界の位は其の當位には體法空なりと雖、未だ萬法唯識の旨を談ぜざるを以て、十喩の觀門尙心外に滯る故に、大乘より之れを判じて體空の相を改ずして拆空觀に屬す。但し寂然界の當位に於て直に拆空と云ふには あらざる也。法無我性とは二空所顯の眞理卽眞如實性を云ふ。五

重唯識の中の第五の遣相證性識に約す、是れ則擧勝爲論也。觀察とは根本智也。於心外有無影像智都無所得とは、初劫の行人の觀解は有無共に未だ明了ならず。故に有無に於て有所得に似たり。然るに第二劫は人法二空の相總して心に當らざる故に智都無所得と云ふ。心外有無の影像とは心外と云ふ。故に當情現の相なり。即人法二執の相なり。根本智は二空の理を證して圓成實性に冥會する故に無所得なり。故に智都無所得と云ふ。即唯識三十頌の句なり。心王自在覺本不生とは當段の經の文相は第六住心なりと雖、意第七住心を含說す。而して此の二句は疏家經の密意を探て加釋す。即覺心乘なり。心王自在とは佛性眞識即眞如實性を云ふ。在緣常淨妄盡眞顯にして生死涅槃に滯ることなき故に自在と云ふ。此の乘は八不中道を以て至極として、直に自心の本不性を覺るを以て佛果と立つる故に覺本不生と云ふ也。得離法之

以下は二心に通ずる句なり。然るに三劫段の發無緣乘心法無我性の文は但し第六住心の三の釋なり。今の段何ぞ第七住心を含說する乎、謂く三劫段には經に覺心乘の別說の文ある故に無緣乘心等の句第六心に限り、今は別文なき故に含說すと見るべき也。若眞言行者等とは經の顯文は唯第六にして、第七にあらざるに、能寄齊には唯第七のみを擧げて能所寄不齊なる乎、謂く疏家既に加釋すれば此の無畏に二心を併存す。中に於て且く深位に就て能寄齊を擧げて顯はれ難きを顯はすを以て、反て巧釋と稱すべき也。

○經云、若復一切蘊界處能執所執我壽命等及法無緣空自性無性、此空智生當得一切法自性平等無畏者。

第六に平等無畏を釋す。中に於て標文、作釋は知るべし。經の蘊界處とは第三の無我無畏を標し、能執所執我壽命等とは其の類非一なれば等の字を以て其の非一を等取す。又第一第二の無畏を擧ぐ、都て我執を免れざるを以て也。法とは第四の法無畏、無緣とは第五の法無我無畏なり。此の前の五無畏を以て所緣の境として空にして自性無性なりと觀察して無畏を得る也。此の無畏に於て第八第九の住心を併存す。經の空自性無性は第八心、此空智生は第九極無自性心にして遮情の極底なり。此れを一切法自性平等無畏と名く。自性平等は即極無自性と空性無境となり。然るに疏家は第三劫の如く第六の無畏は直に能寄齊の人を說くと爲す。密人初地能入の八・九の心なり。而るに此の空智生に正生と、已生とあり。疏主經の密意を探て所入已生の第十の住心を加釋す。猶第五の無畏の心王自在覺本不生の二句の如し。故に於業煩惱乃至亦無所脫と釋する也。

○謂觀自心畢竟空性時、我之與蘊法及無緣皆同一性、所謂自性

無性、此空智生即是時極無自性心生也、於業煩惱等都無所縛、亦無所脫、故云得一切法自性平等、爾時於有爲無爲界二種扼縛得蘇息處、卽是眞言行者虛空無垢菩提心也。

後に作釋の中に亦二あり、初に文を釋し、後に卽是眞言等とは位に配す。初の中に四あり、一に初より無性に至る迄を釋し、二に此空智生等とは此空智生の句を釋し、三に於業煩惱等とは疏主の加釋、四に故云得一乃至得蘇息處は經に合して結成す。經の空の字は其の體を明かすを以て疏には自心畢竟空性と標す。前の三劫段の經の所謂空性なり。經に自性無性とは空の字を釋す。疏には同一性と云ふ、此の空智生等とは第九の極無心なる故に經の空自性無性は第八心也。於業煩惱等とは疏家經の密意を探て第十住心表德實相を加釋す。經の顯文は空智の正生なりと雖、文底密に已生を含說するを以て也。於有爲無爲界二種扼縛等とは經

の一切蘊界乃至及法は有爲の扼縛無緣乘に覺心乘を加へて無爲の縛とす。卽是第八心の所離なり。第八の空性を無爲界に加へて第九の所離とす。第九の空性を更に無爲に加へて第十の所離とし、展轉深入して能所離を辨ずるは此の中の正旨なり。卽是眞言行者等とは第六の無畏には能所寄齊なし。第六の無畏は卽眞言行者の淨菩提心なる故に卽是と云ふ。是れ則天竺流布の宗敎に約する疏家の正宗なり。眞言行者の淨菩提心は第八第九に通ず。然るに此の二心は能入の菩提心、今は所入を直に虛空無垢菩提心と云ふ。唯第十の住心にあり。卽是言の指す處は疏家の加釋の無縛無脫にして表德の實相なり。卽深處に約して釋する也。虛空無垢とは本有之修生なり。

○然此心在纏出纏皆畢竟無相、以如來五眼諦觀尙不能得其像貌、況餘生滅中人、今所以廣明三劫六無畏處、衆多心相者、皆是

擬儀外迹以明修證之深淺耳、上已明見烟之相可以比知火性、但知垢盡處戲論不行、卽是第六無畏依更欲如何表示耶。

上來別して六無畏を釋すること畢て、自下後に無相の淨心を以て相に寄せて明かす所謂を辨ず。中に於て三あり、一に無相淨心を釋し、二に今所以廣乃至之淺深は相に寄せて明かす所由を釋して惣じて六無畏に結す。三に上已明見の下別して第六の無畏を結歎して、兼て後の十喩を生ず。然此心とは前の虛空無垢菩提心を指して釋成す。卽本來淨を以て初地遮情無相の淨菩提心を釋す。在纏出纏畢竟無相は本來淨を示すなり。以如來五眼等とは無相の所由を釋す。之れに付て古來心法色形の論あり、今は遮情の觀門に約する故に尙不能得其像貌と云ふと雖、表德の觀門に約すれば其の像貌を見るべき也。菩提心本具の形色は五大門に約すれば方・圓・三角・半月・圓形・なり黃・白・赤・黑・青なり。一大門に約すれば白色月輪卽阿字なり。內には有・空・不生の不思議の三諦を具し、外には勝義行願三摩地の三種の菩提心と顯はる。而して今の畢竟無相は第四重極位の無相なり。離相之相、無相不具の無相なり。擬儀外迹とは顯敎の應化佛隨情逐機の說なる故に、密敎の法身內證法爾常恒の說に相對して外迹と云ふ。彼の隨情逐機の斷證の知り易きに寄せて、諸佛大秘密の殊に了解し難き諸心相の差別を顯はすを擬儀と云ふ。擬はナゾラフと訓じ、儀はカタチツクルと訓ずべし。中に於て初二劫は所寄の顯を擧げて以て能寄の密を顯はし、第三劫は能寄齊の中に於て前二劫に擬准して顯示す。故に初二劫は能所寄齊門に約して顯示し、第三劫は能所擬准門に由て顯示、卽第三劫に相對して初二劫を外迹と云ふ也。何となれば第三劫に對すれば末なる故に三劫の說段既に然り、六無畏も隨て亦然るべし。三劫六無畏は開合の不同なるを以て也。

三劫段に科して亦是答諸心相と云ふ。六無畏には猶是答前心相句と科せり。而して第四の心相の問已に密を問、隨て答說の三劫六無畏定て是れ顯教にあらざることを知るべき也。心相の名は必ず秘密に就て科することを解すべし。前に述する如く秘密の心相頗る難知なるを以て、斷證の義相を常途に寄せて之れを示すが故に、如來の答說直に秘密の心相を說くにあらずと雖、敢て聲谷の應に違せざる也。上已明見等とは上來は相に寄せて明かす所由を述て、惣じて六無畏を結し了る。眞言行者三密の行を修する時に於て此の六位ありて難處を經過して、蘇息し無畏を得る、一に本尊の三昧に依止する三密修行の位、二に本尊の曼荼羅海會現前する位、三に海會現前の法に於て愛慢を生ぜざる位、四に海會現前等諸法の無自性を覺る位、五に心王自在の勝用を得る位、六に淨菩提心畢竟無相を證する位なり。自下は別して第六

の無畏を結歎して、兼て後の十喩を生起す。上已明とは上の疏云く、以心法微細難知但觀彼所爲事業必有相彰于外譬如見烟之狀貌則火性可以比知と。別して第六の無畏を結するは密教の前五無畏の淺深差別の烟相を見て、第六の無畏の火性を比知すべしとの意なり。然るに此の中微細に辨別すれば二重の比知あり。一前五に對して第六を比知す、二に第六の中に更に細分別するに第八の未極と第九の已極とは尙心垢を存す。之れに對して心垢盡くる處表德の方に顯はるるは眞に第六の無畏なることを比知するなり。第六無畏依の句に限て逗を爲せば唯結前なり。更欲等の七字を加へて讀めば後の十喩段を生起することを成ず。比知に二重あるが如く、亦二重に生起す。卽十喩段の正釋と復次と卽此れなり。正くは正釋を以て三種幻を明すに、初二の幻に望めて第三の卽不思議幻を明かす。之れに就て前五無畏の十喩は還

て戯論と成て第六無畏に至て心垢已に盡くべし。然るに更に細論觀察すれば兼て復次釋を生ず。卽初地乃至究竟如來地なり。第六の無畏の上に於て更に微細妄執を斷盡して餘なからしむるは眞の心垢の盡處なり。又今疏に心垢盡處等とは初地淨菩提心の位は麁細極細の三妄盡處なる故に、心垢盡處等と釋す。微細妄執を云ふにはあらず。疏第三云く菩薩亦如是依心進行故名此心爲地、以心尙有所依故未名正遍知、如來已度微細戯論、進修都息故名超越心地也と。菩提心論云く、既破人法、上執、雖能正見眞實之智、或爲無始間隔、未能證如來一切智智と。微細戯論及び無始間隔は卽微細妄執なり。如何表示とは心垢盡處を表示す。之に付て二あり、一には前五無畏に對して心垢盡處は第六無畏なることを生起す。二には十地に於て心垢盡處唯如來地なることを生起する也。

○經云秘密主若眞言門修菩薩行諸菩薩深修觀察十緣生句當於眞言行通達作證乃至如實遍知一切心相者。

自下十喩段の經文を釋するに二段ある中、初に牒文なり。眞言修菩薩行とは、十喩を修觀する位は廣く六無畏十地に通ず、故に此の中、疏に正釋・復次・の兩釋を分て、地前（正釋）地上（復次）を究盡す。十六重玄漸次證入の阿闍梨を以て的證たり。而るに阿闍梨の位は寂然界に起ると雖、剋實して論ずれば、最初一毫の微善を生ずるより阿闍梨に攝して、心垢を淨除するは此の觀を最要とす、初地の位に至て始めて此の十喩を觀ずと云ふにはあらず。然るに正助の二行を辨別せざるべからず。七日作壇の曼荼羅行及護摩・花水供・又は阿字・月輪觀等觀修薰練、各々具に事理を雙修すと雖、卽理の事行を正所行と爲す、懸かに顯教の一心の理觀を修するに異れり。然るに今十喩を說くは卽事の理にして其の相は事觀に

涉ると雖、其の旨は趣きを異にして、正行助行流派を分てり、然り而して事行を三諦卽一の阿月の觀にこらすと雖戯弄に似ず。理觀を阿月圓具の三諦に練ると雖、一心無相の眞觀に沈まず。正助の二行殊なりと雖、不思議は一なり。初心の行者にありては論なし、三密の修行觀練年久ふして海會現前せん時、愛慢を生ずることあらば、心垢を淨んが爲に此の助行を行じ、無所住に安住すべし。此の助行は阿字本具の三諦相卽の妙觀なる故に、眞理を觀ずと雖、一として阿字、月輪の事體を離れざるなり。事理俱密の中に卽事の理を觀じて、以て卽理の事行を助く、故に最も至要なり。是れ助行なるを以て、心垢の愛執等生ぜざる時は之を修せざるも亦可なり。初心の行者は多くは然る可しと雖、練行漸く積み種々微妙の境界現前せん時は、此の十喩の方便にあらざれば、執著を生じて三昧を退失して、摩羅の境に入らん、謹まざるべからず。是

故に行人最要斯觀にあり。深修觀察は十六重に通じ、通達亦然り、作證は初地以上に約す。凡そ劣惠の人に二の大患あり、初心には懈怠多ければ、初劫に開て四の蘇息處を立て、慢は已達に多ればは十喩觀修に正釋復次を分て廣く地上を演ぶるなり、乃至は經の云何爲十至工巧大智の廿四行十二字を越るなり。

○是略答（シテスル）前問中修行句（ヲ）也。

前金剛手の九句の問、中の第七の及彼行修行の句を答ふ。略と云ふは具緣品以下の廣說に對して略と云ふ。又彼の正行に對して是れ助行なる故に略と云ふ。助行と雖此の修行の句を出でざるなり。然るに修行句とするは、經の遍知心相の文に違するにあらずやと云ふに、經の遍知心相は十喩の義を以て、一切衆生の心相を觀じて了了に證知するを云ふ、卽所觀の境界の心相にして行者の心相にあらざるなり、故に違することなし。

○如下文萬行方便中無不藉此十緣生句淨除心垢是故當知最爲旨要眞言行者特宜留意思之。

具緣品以下所定の法を指す、萬行卽方便なり、方便は進趣の方便なる故に。無不藉此等とは、上求下化の萬行の中にをいて、一一に此の十喩觀をさしはさみて觀ずるなり。祕藏記に曰く如境界中見界會聖衆及餘一切事皆當入十緣生句觀察不信而信之唯當每係心於本不生際無留所觀境。文又云く於十喩觀密嚴海會現前時觀如陽炎其意如何若思至極其意留著又作執心譬如磨鏡時見現小影像停留時遂不成實鏡。文此の兩文實に旨要なり。不信而信之とは、特に信念を作さず、諸相を亡泯して本不生際に住するを名て不信と云ふ。此れ卽眞實信なれば而信と云ふ、更に之を述して每係心於本不生際等と釋するなり。疏第六に云く、從初發心以來深觀十緣生句入此地時得度性空彼岸故曰不得一切諸法離於有

性復以善巧方便於如々不動中起十緣生無邊大用以如幻三昧遍至十方佛刹親近種々善智識普學無量度入門隨諸衆生應以何等像類言音而得度者卽皆現之而爲說法。文知るべし十喩觀は遮情表德に通ずることを。

○然統論此品中十緣生句略有三種一者以心沒蘊中欲對治實法故觀此十緣生句如前所說卽空之幻是也二者以心沒法中欲對治境界攀緣故觀此十緣生句如前所說蘊阿賴耶卽心之幻是也三者以心沒心實際中欲離有爲無爲界故觀此十緣生句如前所說解脫一切業煩惱而業煩惱具依卽不思議之幻也。

摩訶般若中十喩亦具含三意。

此の住心品中所明の十緣生句は、眞言行者所修の觀行にして、從顯入密迂廻の機の所觀を混ずるにあらず。然るに此眞言行者の所修の十喩の高尙にして、且つ微妙なることを明さんが爲に、初

劫の五喩第二劫の六喩に對して優劣を分辨し、第三の卽不思議幻を簡取するなり。故に疏釋能對には各々に觀此十緣生句と云ひ、所簡には一々に如前所說と云ふ、相對明白なり。此の十喩も若し初劫の五喩の觀の如く、二劫の六喩の觀の如く、誤て意を爲さば、卽空卽心の幻となるを以て取らざるなり。今は第三の不思議幻を取ると。爲云以心沒蘊中とは、湛寂の菩薩の位なり。欲對治實法故は、一重の法倒を對治せんと欲する寂然界の位なり。此の作意を以て十緣生句を觀ずれば、還て初劫の所寄齊の五喩中の幻と成て、是れ眞言行者所觀の十緣生句にあらずとなり。第二も准じて知るべし。唯第三の不思議幻のみ三劫に通ずる眞言行人所觀の十緣生句なり。心沒法中等とは、法は寂然界能觀の十緣生句の法なり。則ち心が能觀の法中に沒するなり。境界攀緣とは、寂然界の位は心外に境界を認めて、之を空せんと觀ずるは頗る困難

なる故に攀緣と云ふ。又所對に第七住心を言はざることは、第六心を擧げて第七を顯すなり。三者以心沒心實際中等とは、十喩の說段は第三劫に在て八・九・十の三心に通ず、必しも所離は第八心に局り能離は第九なるにあらず、第六の無畏已には八・九・十の三心に涉る、之に次で秘密主眞言門修菩薩行等と云ふ、知るべし、深修觀察の十喩も、必ず三心に通ずべきことを。第六無長に空（第八）と空空（第九）と大空（第十）表德とありて、能離の心となる。空之所離は第七住心を有爲無爲界とす、空空之所離は第八沒心、大空之所離は第九實際なり。細論するに是の如しと雖、此の中細を全ふして總合して、沒心實際と云ふ、能離の十喩の觀も亦准知すべし。能觀の十喩、第八第九も眞言行者なる故に、阿字本具の三諦卽一の觀なりと雖、遮情を本とすれば解脫一切業煩惱なり、新義相承の四重の中、初の遮情無相』の分齊なり、初地の入心法明道除障三昧

なるを以てなり。初地大空三昧を而業煩惱具依に合す、無非佛事の表德實相なる故なり。此れ四重の中第三甚深無相の十喩なり。唯如來のみありて第四重無相の極底を窮む。然るに今且く第二重の有相の事密を略することは、心垢對治の理觀を專にするを以てなり。此の遮情表德を惣合して經に深修觀察と云ふなり。

初重遮情二〈一顯實遮情　阿字卽空體非用。二遣迷遮情　密教の遮情は卽體の用なるを以て經の非青非黃等自外執を遮す、遮情と雖表德に卽するを以て顯の遮情に同ずるにはあらず。

摩訶般若等とは、大品般若第一緣起品なり、卽空卽眞卽不思議の三幻を含するを以て具と云ふ、然れども表德を云ふにはあらず。

今特に大品を指すは、何の意あるやと云ふに、心垢對治方便助觀は空理の觀を專とする所以なり、地前は無論、たとへ地上と雖海會現前せん時に、暫く心垢起らば理密の遮情を兼修すべきを以てなり。又三種幻配位に付て、中川實範上人阿字義第四の意は、卽空幻は初劫所觀、卽心幻は第二劫、卽不思議幻は第三劫乃至如來地の所觀なりと。然るに經に修菩薩行諸菩薩と云ふは、實に修行の相を示すは是れ因位の法なる故に、修菩薩行諸菩薩と云ふと雖、所授の法、果位になかるべからず、故に當段唯有如來乃能窮此と釋し、又た下に毗盧遮那以上々智觀盡其源底と云ひ、又以十緣生句作無盡莊嚴と云ふ此の意なりと。瑜公の意は因に局るべしとなす。經には菩薩行と云ひ、疏には修行句と云ふ、故に而して宗家の疏文次第に十喩觀通因果文とあるを以て會し難しと云ふ今云く因果の兩位に通ずべきことは、宗家の文次第分明なり。又

疏に兩處唯有如來と云ふ、豈に果に通ぜざらん乎。然るに經に菩薩行と說き、疏に修行句と云ふは、心垢對治は唯菩薩にのみありて至要の觀なる故に、要に約して標す。如來は究竟して微細の心垢もあることなき故に、上に智觀現前する時、明かに十喩の源底をきわめて永く垢體を斷ずるのみ、果地に在りては心垢對治の要にはあらずと雖も、十喩の源を窮むるは唯如來に在るを以て、果に通ずるを以て正とす。

○今此中云深修觀察者、卽是意明第三重、且如行者於瑜伽中以自心爲感佛心爲應感應因緣卽時毘盧遮那現所憙見身說所宜聞法然我心亦畢竟淨佛心亦畢竟淨若望我心爲自卽佛心爲他今此境界爲從自生耶他生耶共生無因生耶以中論種種門觀之生不可得。

深修觀察とは、復次釋由所證轉深故言深觀察也と釋するに準ずるに、正釋は地前は證觀にあらずと雖、比智轉深以て例すべし。故に地前地上共に眞言行者不思議の十喩を觀ずる上の淺深相對なることを知るべし。彼の顯の卽空卽心幻の淺なるに對して、深修と云ふと解すべからず。且如行者等とは、行者淨菩提心の信水淨ければ、本尊の影を感ずる故に以自心爲惑と云ふ、信水淨ければ本尊の影之に應ずるを以て佛心爲應と云ふ、應は加なり、感は持なり。不思議幻の相に二段を分ち、初に勸體を示し、後然我心の下觀相を明す、此れに亦二あり、初空不生後而形聲宛然の下、三諦卽一の妙觀を明す。今は海會現前は現境の體にして、天台の一念の陰心の如し。觀相は阿字の三義あり、中に於て空不生は能入の第八第九の心にして、專ら具に三諦圓融を觀ずと、尙遮情遣迷の分齊に歸して、未だ相對を脫せず。是則於業煩惱解脫の位なり。三諦卽一の妙觀は、第十住心にして玆に至れば、相對を離れて虛空

無垢大菩提心に安住す、是則而業煩惱具依の無非佛事の位にして論幻卽幻なり。然るに初地能入の方便に遠と近との二方便あり、第八第九は共に第三劫なれば近方便と名く、又初て本尊の三密に住して、有相の三昧現前するより、(第三住心)心に自在の用を得る(第七住心)に至る迄は遠方便とす。此の遠近の方便は、三劫の位にありて比量知の觀行なるを以て、尙行者と本尊との二分を存して心念未だ亡せず、定心の所現也と雖も尙心外虛妄の境界に攝す、種々の不思議の境界に似たりと雖、未だ如々の妙境に徹せず、已に初地に入てより以後は、絕對の不思議地也、此れを秘して信解行地と云ふ。果地の四曼を以て行位とする故に、亦は自家佛乘の十地とも號す、顯教の假施設の階位に同じからず。此の位敢て本尊と行者との二分を存するにはあらざれども、微細の心念未だ亡せざるを以て、因行證入尙ほ心地に由て行すれば名け

て菩提地と名くれども、未だ大覺位と稱せず、微細の戲論尙因果を隔別するを以て、海會現前して自性圓極の位にあらざるなり。所憙見身所宣聞法等とは、文相は大に神變加持の題釋に同じ、然るに題釋は佛の往昔の悲願を因とし、衆生を緣として加持の故に觀ずる所なれば、卽質加持と名く。今は行者の自心を因とし、佛の大德を緣として現ずる所、行者觀心の影像なる故に離質加持にして加持界なり。是の如くの加持界所現の觀境に種種不思議事を見ると雖、行者心變の影像なる故に法體空と觀ぜしむ。若し暫くも之に著すれば、中路に淹滯して實境に達せざるなり。故に觀門には體空を正とす、若教門に約せば、毗盧遮耶所現の身說、卽事而眞の妙境なり、何ぞ其の體を空せん。菩提心本有の具德にして、顯教の如く無明緣起の法にあらざるを以ての故に、唯行者の迷執を遣るのみなり。學者義門を錯ること勿れ。然我心亦畢竟淨

等とは、上は觀境の體を明し、自下は其の觀相を示す。中に於て初めに空不生を明す。吾が密教に於て、本不生を議するに空不生あり、中不生あり、行者表德實相を觀ずと雖、復た自ら業煩惱解脫となるは是れ空不生なり、正くは第八第九の二心にありと雖も、兼ては眞言行者の初二劫もあり、中論に引證すと雖、隨宜轉用なり。今は阿字の妙空にして懸かに隔てり、此の空不生を畢竟淨と稱す、遮情の極る所なり。遮情既に極て表德方に顯るゝを次に而形聲宛然と云ふ。然而の字高著眼せよ。於業煩惱解脫を轉ぜずして、直に而業煩惱具依となす即中不生なり。

○而形聲宛然即是法界、論幻即幻論法界即法界、論遍一切處即遍一切處、論幻故名不可思議幻也。

後に三諦即一の妙觀を明す。形とは所憑見身なり、聲とは所宜聞法なり、卽是れ感應の因緣より生ずる所の海會現前なり。宛然とはソノマヽニと云ふ意にして、卽有の幻事を云ふ。卽是法界とは惣じて有空不二の義を釋す。論幻卽幻の下、正く三諦卽一の觀相を示す、幻は形聲宛然にして假なり、法界は卽空なり、卽有の幻を全ふして卽空なれば、非空非有三諦卽一の中不生なり、此れを遍一切處と云ふ、卽中道の義なり。然るに三諦圓融の中に於て、今は幻を論ずる故に名不可思議幻なりと釋するなり。天台玄義二之二云く、約如明空、一空一切空、點如明相、一假一切假、就是論中一中一切中、非一二三、而一二三、不縱不橫名爲實相と、此れ準據なり。然れども其の旨懸かに異れり。密教の三諦は阿字の三義にして卽三部三點なり。興教大師云く、言空言有、懸過天台、況中道乎と。今且く五大に約して之を示さば、五大互に五大を具して、重々無際なるは表德なり、中不生なり。中に於て具に其の法體を論ずるに有空不生宛然として亡泯せず、有は表德五大無盡なれども五相泯

せず、一切幻ならざるはなし、法法自爾なり、豈唯因緣所成の假相のみならんや、其の體泯せずして重々無盡なれども、無障無碍なるは即是れ遮情即空の相則法界と論ずれば一切法界ならざるなきなり、空何ぞ豁虛無物ならん、有空を超絶して不二なるは無論中道なり。

○復次言深修者、謂得淨心已去、從大悲生根、乃至方便究竟、其間、一一緣起、皆當以十喩觀之、由所證轉深、故言深觀察也。

上來の正釋は地前の三句に約して、初地を以て究竟とす。以下の復次釋は、地上に於て三句を論ず。地前三句の究竟の句を取て以て後の因の句とするは、三句の常例なり。此の中惣じて初地と云ふと雖、細論すれば入心の第八第九は尚地前の根句に屬す。住心の最初に本有の大菩提心に安住する位を、地前に望て究竟の句とし、地上に對して因句とし、以て菩提心の體とす。修生起本の心

を發してより以後、乃至第十地を根句とす。佛果の金剛心無間道の法明除障も根句の屬なり、獨り第十一地佛果究竟の位を以て究竟の句となすなり。而して三劫の中には、第八第九尚空不生にして遮情の分齊なり。初地の住位方に中不生に達す。十地は三句異と雖、愈々廣愈々深にして併ら中不生の觀なり、觀の別を知るべし。言深觀察也を以て復次釋の終とす。

○且如四諦義、直示娑婆世界已有無量無邊差別名、又況無盡法界中逗機方便、何可窮盡、今行者於一念淨心中通達如是塵沙、四諦空則畢竟不生、有則盡其性相、中則擧體皆常、以三法無定相故、名爲不思議幻、如四諦者、餘一切法門例耳、是故唯有如來、乃能窮此十喩達其源底。

上來の深修觀察は行者能觀の行相、自下は一念所達の妙境を明す。且は不盡の辭、如の字指事なり。法數は誠に多けれども、但し四

諦を擧ぐ。世界無量なれども直に安婆を示して一隅を取るなり、四諦の無量は八十華嚴第十二聖諦品に出でたり。能觀の行相は地前空不生、地上中不生等の別ありと雖、所觀の法と義とは三諦融妙にして、最初一毫の善心を發起するより、乃至佛果比觀と證觀と、殊に淺深異と雖、其の相狀の差別の見を分つべきあることなし。故に法には四諦を擧げて無盡を釋し、義は三諦にして窮めも已ることあることなし。其の源底を究むるものは唯如來のみなり。

○此經所以次無垢菩提心卽明十喩者、包括始終綜該諸地。既觸緣成觀、不可縷說、今且依釋論明其大歸耳。

上來十喩の惣標の經文を釋すること畢て、自下は別說の經文を解す。中に於て大に二ありて、此の段は初に結前生後の文なり。無垢菩提心とは、第六無畏を指す、疏に第六無畏を、卽是眞言行者、虛

空無垢菩提心、と釋するが故に。包括とはカネク、ル。始終とは三劫の始終。綜該とはスベカネル。諸地とは十地なり。一切境界の緣に觸れて十喩の觀を成ずる故に觸緣成觀と云ふなり。釋論とは下に引く所の智度論の第六なり、大歸は大綱と云ふが如し。

○經云、云何爲十謂如幻陽燄夢影乾闥婆城響水月浮泡虛空華。旋火輪、乃至云何爲幻、謂如呪術藥力能造所造種種色像惑自眼故見希有事展轉相生往來十方然彼非去非不去、何以故本性淨故、如是眞言幻持誦成就能生一切者。

後別說の經文を釋する中、此れは經文を牒擧す、乃至は秘密主彼眞言より、如是觀察迄の十九字を乃至す。此の十喩の觀を道範遍明鈔第廿一に依るに、一向表德自證の觀と云ふ。顯敎に望めて對辨して釋を爲す時は、表德とも云ふべきなり。然れども宗內に於て細分別すれば、必ずしも一準ならず、若能觀の行相に約せば、眞

言行者の第八第九共に、三諦卽一の妙觀をコラスと雖、尙空不生の相にして業煩惱解脫に攝せられて、未だ表德とならず。初地以上の無非佛事の悟を表德とす。遮表不二の妙觀なりと雖、地前に望むるを以ての故に、惣じて表德と稱す、而業煩惱具依の妙觀なり。能觀の行相に就て此の差別あり、若し所觀の法體に就かば、阿字の有空不生の三義三部三點非橫非竪なり。眞言行人は最初發心より之れに住せり、況や初地以上に於てをや。然るに此の三諦卽一の觀に正助の二觀あり、若し無相の行に約すれば甚深の故に正助の觀相の分別すべきなしと雖、有相劣惠の機に約すれば、其の行有相の故に定て二別を辨ずべし。具緣品以下に明すところの曼荼羅行の灌頂の支度、護摩・花水供・阿字・月輪觀等の觀修は、三諦相卽を觀ずるにあらざるが如くなれども、密敎に於ては之れを不可思議三諦の妙觀と云ふ。之れ事理具密の敎なる故にして天台・花嚴の唯理密を談ずるとは同じからざるなり。此の事理不二の中に、前に云ふが如く、理に卽することは正行なり、事に卽する理觀は心垢對治方便助行なり、正助茲に相別れたり、正行と混ぜざれ。助行の故に若海會現前を拜見するも、心垢發せざる時は助行を修せざるも敢て閒なきなり。大般若經第一緣起品の所說此の中の十喩と同なり。

○佛說(玉ヘリ)藥力不思議、如人以藥力故昇空隱形履水蹈火、此事非諸論師等能建立因量出其所由亦非可生疑謂定應爾或不應爾過如是籌度境界唯親行此藥執持行用者、乃證知耳。又如藥術因緣示現能造所造種種色像、雖於衆緣中一一諦求都無生處、而亦五情所對明了現前、雖展轉相生往來十方、然亦非去非不去、是事亦非籌度思量之境。

藥力不思議とは、經には呪術藥力と說けり。疏の此の段は但し藥

力に由るものを釋す。印度に二の幻師あり、但し藥力のみを用ふるは通達の幻師なり、呪術と藥力とを兼用するは越格の幻者なり。而して幻師は自ら能く假事にして實事にあらずと知ると雖、他人は幻惑に由て嘗て假なることを知らざるなり。此の幻事に相と用とあり、疏に不思議とは幻事の相用を惣じて標す。如人の下は相を擧げて用を顯す。相は昇空隱形履水蹈火等なり。其の相は不思議にして其の用は生而不生なり、此の相に自ら自知と他の不知とあり。又如藥術乃至思量五境とは、後呪術藥力兼用者を明す。此の中には相用並擧げたり。疏に而亦五情所對明了現前とは、經の惑自眼故見希有事の句を釋す。雖展轉相生の下は用を明す。相を明すには無而忽有を示して、無而を與へて忽有を奪ふ、故に雖於衆緣中等と云ふ。用を釋するには生而を與へて不生を奪ふ、與奪知るべし。是事等とは反て不知を擧げて自心を示す。經に

生而不生の所由を示して、何以故本性淨故とは幻事の自性空なるを以て本性淨と云ふ。而して意法爾本有の淨菩提心より、而も自在神變加持の大用を示現するに合せんが爲なり。無相に相を現ずるは大に同じきを以てなり。此の疏の兩段は通途藥力を用ゆる幻者と呪藥兼用する强幻者とを明すものなるを知るべし。

○釋論云、佛問德女、譬如幻師、幻作種種事、於汝意云何、是幻所作內有不、答言不也。又問外有不、內外外有不、從先世至今世、今世至後世不、幻所作有生者滅者不、實有一法是幻所作不、皆答言不也、佛言汝頗見聞幻所作伎樂不、答言我亦見亦聞、佛言若幻空欺誑無實、云何從幻能作伎樂、女言大德是幻相、法爾雖無根本而可聞見、佛言無明亦如是、雖非內有乃至無生滅者、而無明因緣諸行生、若無明盡行亦盡、乃至廣說。

幻事の無而忽有を證成す、智論第六なり。然るに智度論は德女の

問佛の答なり、今は之に反す。無畏三藏は梵本を引證する故に、漢譯の本と不同なるも怪むに足らず。此の中不生而生は卽起幻の相なり、菩提流支譯の德女所問の大乘經一卷あり。

○今此眞言門喩持誦者亦復如是、如下文廣說、依三密修行得成一切奇特不思議事、雖一一緣中諦求畢竟離於四句、法爾如是不異淨心而自在神變宛然不謬、此事亦非諸大論師等聰辨利根者所能測量、獨有方便具足得成悉地者自證知耳。

喩持誦者の合法は惣相麁論なり。若し別して合法せば、幻師を以て持誦者に喩へ、藥術の因緣を以て三密修行に喩へ、所觀の希有の事を以つて海會現前に喩ふるなり。如下文廣說とは、悉地出現品等を指すなり。依三密修行等とは、疏第十五に云く、如意珠滿一切願隨心所欲、今觀是彼從珠得生耶、從人心生耶、當知不從珠出、不從人心出、不共不無因緣、但和合有耳、今悉地不思議神變亦如是、

但猶眞言觀本尊及身印等緣、而成悉地由眞言故、口業淨觀本尊故、意業淨印、故身業淨三事平等、故自然而有不思議業、然亦不可分別、無思無爲也。取意又疏第十一云く、所謂眞言悉地本來成就、何以故、如來現證如是不思議法、所謂阿字、自體從本已來具足無量自在中不思議力、此悉地體常住不變、但由行人不自了知故、不得如是之果、今以此行淨其身口意業、若能與法相應卽自成就、諸法自爾終不虛也、不思議果衆緣會時、自當生起、如大海潮終不失時と。

○經云、復次秘密主、陽燄性空彼依世人妄想成立有所談議如是眞言想唯是假名者。

釋論云、以日光風動塵故、曠野中動如野馬、無知人初見之爲水、衆生亦爾、結使煩惱、日光動諸行塵耶憶念風、於生死曠野中轉、無智慧者謂一相爲男、一相爲女、復次若遠見之謂以爲水、近則無水相、如是遠聖法者不知無我及諸法空、於陰界入性空法中

生人想等、若近聖法則知諸法實相、是時虛誑種種妄想盡除、此經意云如世人遠望曠野遠望之者徒見此炎、炎之相強立假名、求其實事都不可得故云妄想成立有所談議也、如眞言行者於瑜伽中見種種殊特境界乃至諸佛海會無盡莊嚴、爾時應作此陽燄觀了知唯是假名離於慢着轉近心地則悟加持神變種種因緣。但是法界焰耳故云如是眞言相唯是假名。

上來幻を釋すること畢て、自下陽炎を釋す。牒經作釋文の如し。陽炎は日光と風と塵とに由て現はる、遠くより見て水に似たるの相あるは假にして、本來無なるを性空と云ふなり。成立とは水相を成立するなり。釋論は智論第六なり。野馬とは莊子逍遙遊に曰く野馬也、塵埃なり、生物之以息相吹なり。郭象云く、青春の時陽氣發動遙に望に、藪澤之中、猶如走馬、謂之野馬と。野馬に二意あり、一には所迷の境界を野に走る馬に喩ふ、故に如の字は列如なり。二には能迷者を云ふ、故に如の字は指事の如なり。野馬は卽渴馬なり。大師の寶鑰の上に云く、渴鹿野馬馳塵鄉と。若し野馬を能迷者とする時は、如野馬の三字を次の無知人に冠すべし。又智論惠影疏第二の意に依らば、野馬とは陽炎の異名なる故に、如は指示なり。衆生亦爾とは、智論には男相女相亦如是と。故に所迷の境を指して喩中の水相に合して亦如是と云ふなり。然るに今の文は、能迷の人を指すに似たりと雖、男女の相を衆生と云ふ。卽衆生執なり。結使煩惱等とは、煩惱內に起て熱惱するなり、日光の如く此の煩惱が造る所の諸業が、佛性を穢すこと塵埃の如く、邪憶念の妄想は風の如くなり。煩惱日光、諸行の塵を動し、邪修念の風、生死曠野中に轉ずと讀むべし。人想等とは法相を等取す。何となれば能治を諸法實相と云ふ。人法二空に通ずるを以て、所治隨て然るべし。炎之相とは炎は水相を現はす因にして、光なり。相とは水相に

して果なり、故に隔法の之の言を置くなり。心地とは自身本有の淨菩提心を云ふ。加持神變とは加持界の海會現前を云ふ。此れが由て來る所以を因縁と云ふ。機根萬差にして一准にあらざる故に種々と云ふ。法界焰とは加持神變の因縁は、行者の觀心に現ずる所の妄境界なり、卽水相に喩へて空なり、故に唯假名と云ふ、卽體空なり。其の體焰光にして水相なき故に虛融無碍なり、之を假りに名けて法界焰と云ふ。法界卽焰にして法爾常恒の應用なり、卽大空三昧なり。唯是假名に付て執空體を論ずるは、本法相宗に於て依他圓成の無性を談ずるに、執空體空の二義あるに依る。南寺の傳は執空、北寺の傳は體空なり。然るに瑜公の指心鈔の此の段の釋には、今觀海會是執也と釋して執空の義を取れり。第三重第十、十喩體空の草子には體空の理を立せり。先きにも論ずるが如く、密宗に敎觀の二つあり、若し敎門に約すれば執空の義を取

て顯密宗義の差別を辨ずべし。然れども此の中經疏は、觀門に約する故に專ら觀門に於て體空を成立し、以て明かに執捨の源底を盡す可し。故に憲師の學獨步と稱せざるべからず。案ずるに二意ある歟、一には有相の機、專ら有相の觀をコラス、時に當て唯執のみを捨つとなさば、執尙滯り留て究竟して、執を盡すこと能はざるべし。然るに體空を觀ずるに由て、自然に所執を捨つるに於て究め盡す也。彼の相宗の後二無性の體空の如し。二には淨菩提心圓かに三德を具す、卽阿字の有・空・不生の三義なり、卽橫竪不二の三諦なり、此卽空の德を卽名て顯實の遮情となす。行者をして此の顯實の空を觀ぜしむる時に、執情實に捨するなり。若此の顯實の空を觀ぜざれば、執を捨つること能はず。故に憲師は相宗北寺に同じく體空の義を立す。行人此處に於て注意し表德に誇ることなく體空の觀を修すべきなり。

○經云復次秘密主如夢中所見晝日牟呼栗多刹那歳時等住種種異類受諸苦樂覺已都無所見如是夢眞言行應知亦爾者。

自下第三夢を釋す。如夢中所見とは惣標なり。晝日牟呼以下は夢中に經る所の時間の不同を擧ぐ。牟呼栗多此に須臾と云ひ、刹那は念即一念なり、時の字は前の一々に蒙る、等の字は何月何日を等取す、如是夢眞言行とは、加持界海會現前の相を以て夢と名くるなり。此の一段に就て、聖憲師の意は行者の妄心の上に浮ぶ所の海會現前の相を夢と云ふ、卽空の義を示すなり。宥快師の意は夢中所見の一多無碍不思議を擧げて、眞言行者瑜伽定中の夢の一時多時虛融無碍に類すと。云云

○釋論云如夢中都無實事謂之有實覺已知無而還自笑人亦如是諸結使眠中實無而着得道覺時乃知無覺亦復自笑又如以眠力故無法而見法無喜事而喜無瞋事而瞋無怖事而怖衆生亦爾無明眠力故不應瞋喜憂怖而生瞋喜憂怖等故。

智論第六取意なり。又夢に五種ありと說く、謂く若心中不調にして熱氣多ければ、多くは水を見、白を見る。若し冷氣多ければ、多くは夢に火を見、黃を見、赤を見る。若し風氣多ければ、多くは飛ぶ事を見、黑を見る。又復見聞する處のことを多く思惟し念ずる故に夢に之を見る。或る天夢を與へて未來の事を知らしめんと欲する故に、夢に此れを五夢と說く、皆實事なきなり。又夢は何識の所業なりやと云ふに、第六意識が睡眠の心所と相應して夢事を爲すなり。瑜伽論第一に、第六意識の十五不共業の中に夢を以て第六識の不共事とす。但し小乘の意は、睡眠の位に善惡の意識起ることなしと雖、無覆無記の意識起て睡眠の心所と相應する故に夢を見ると。大乘は無心睡眠の位には前六識都滅するが故に夢事を見ることなし、有心睡眠の位は前五識は滅すと雖、第六識現

起して夢を見ると。

○今復明此夢事不思議、邊如夢中自見往壽一日二日乃至無量歲有種種國土及衆生族類、或昇天宮或在地獄受諸苦樂覺時但一念間耳、於覺心眠法因緣中四句求之了不可得、而夢事照然憶持不謬、以一念爲千萬歲以一心爲無量境此事非世間智者憶度籌量能盡其源底、亦非可疑之處、獨夢者親證知耳、今此眞言行者、瑜伽之夢亦復如是、或須臾間備見無量加持境界、或不起于座而經多劫、或遍遊諸佛國土、親近供養利益衆生、此事諸衆因緣中觀察、都無所起不出一念淨心、然亦分別不謬、此事誰能思議出其所以、然實獨證者自知耳。

自下經の一一の文を釋す。故字は今復の上に置て句頭とするを可とす。或須臾間備見無量加持境界とは、喩の以一心爲無量境に合す。或は不起于座等とは喩の以一念爲千萬歲に合す。加持境界とは加持界流現の四重曼荼羅の海會現前を云ふ。諸衆因緣等とは自心と佛心と共に無因との四句推研を云ふ。一念淨心とは得者淨辨心なり。卽海會現前の境界は畢竟空なり。

○行者得如是境界、但當以夢喩觀之心不疑恠亦不生着、卽以普現色身之夢作無盡莊嚴、故云深修十句也。

上來は文に就て釋することを了て、自下は義に依て結す。如是境界とは海會現前を云ふ、卽以普現色身之夢等とは觀門の得益を明す。古來二義あり、一には十喩の觀の得益は多分先づ初地の益を明すを以て、今も亦初地なるべし。初地以上は除障三昧を得て、化他を得て化他利物の行を成就す分に、無盡莊嚴を證する故にと。一には此の中には十喩の觀の得益の究竟を擧ぐ、故に第十一地を指す。下疏云く毗盧遮那卽以此十緣生句不思議法界作無盡莊嚴藏と。

○經云、復次秘密主以影喩解了眞言能發悉地如面緣於鏡而現

面像彼眞言悉地當知如是者、此中言影即是釋論、鏡中像喩、彼論云如鏡中像非鏡作非面作非執鏡者作非自然作亦非無因緣作何以非鏡作若面未到鏡則無像故何以非面作無鏡則無像故何以非執鏡者作無鏡無面則無像故何以非自然作者若未有鏡未有面則無像像待鏡待面然後有故亦非無因者若無因緣應常有應常無若除鏡除面亦應自出以是故非無因緣當知諸法亦復如是以我不可得故一切因緣生法不自在故諸法屬因緣故非自作若自無他亦無故非他作若他作則失罪福力亦非共作以有二過故亦非無因如先世業因今世善惡行緣從是得苦樂一切諸法必有因緣以愚癡故不知耳如少兒見鏡中像心樂愛著失已破鏡求索智人笑之失樂更求亦復如是亦爲得道聖人所笑。

第四に影を釋す。彼論云如鏡中像とは、智論第六の文なり。下の聖人所笑迄は論文なり。論文の順次に約すれば、慧影疏の如く、鏡は自にして因、面は他にして緣なれども、今疏は之れに反せり。此れ義に就て釋を爲す、尤も今經文に親し。何となれば經に如面緣於鏡と云ふ、卽面の鏡を緣とするが如しと讀むべし。又上十四疏云く、若望我心爲自、卽佛心爲他と、以て知るべし。

○今此眞言門中以如來三密淨身爲鏡自身三密行爲鏡中像因緣有悉地生猶如面像若行者悉地成就時乃至起五神通住壽長遠面見十方國土遊諸佛刹皆以此喩觀察是事從自生他生耶若謂他三密加持能授是果則衆生未修行時佛之大悲平等何故不令成就若謂自如說行能得是果何用觀察三密淨鏡之身求加被耶若共生則有二過何以故若謂我心爲因待彼衆緣方得成就者卽此因中先有悉地果耶爲先無耶若先有之衆緣

則無所用若先無之衆緣復何所用然是悉地成就亦復非無因緣。

如來三密淨身は鏡にして緣なり、自身三密行を面に喩因なり。鏡中像因緣とは面を以て因緣とす、即緣の意なり。又面像とは面之影像にして依主釋なり。然るに指心鈔は今疏を以て慧影疏に同ぜしめんとして亂脫を讀で、猶如面像の面の字を、上の三密行爲の下に廻らして、三密行を面とすと讀む、甚だ不可なり、依るべからず。又悉地成就とは梵漢並擧ぐ、惣じて海會現前の相を指す。乃至とは悉地の相非一なる中に於て、他を乃至して四種を擧ぐるなり。起五神通住壽長遠は持明悉地即下品なり。面見十方國土遊諸佛刹は中品悉地なり。三密淨鏡之身とは如來を云ふなり。

○故智論鏡像偈云非有亦非無亦復非有無此語亦不受如是名中道不應如彼少兒妄生取著也如作如是觀故行者心無所得不生戲論故曰應如是知。

智度論は第六なり。然るに此論は畢竟不生の中道を明すを以て故の字は上に屬して讀む可し。應如是知は經文には當如是知とあるなり。

○經云復次秘密主以乾闥婆城譬下成就悉地宮者。

自下第五乾闥婆城の喩を釋す。

○釋論云日初出時見城門樓櫓宮殿行人出入日轉高轉滅此城但可眼見而無實相有人初未曾見意謂實樂疾行趣之近而逾失日高遂滅飢渴悶極覩熱氣如野馬謂之爲水復往趣之乃至求之疲極而無所見思惟自悟渴願心息行者亦爾若以智慧知無我無實法者是時顚倒願息聲聞經中無此乾闥婆城喩又以城喩身說此衆緣實有但城是假名爲破吾我故菩薩利根深入諸法空中故以乾闥婆城爲喩也。

謂實とは乾闥婆城も中の樂人等も眞實と思て、面白からんことを樂欲して疾く行くなり。飢渴悶極等とは、陽炎の喩を擧ぐ。智度論には展轉して乾城と陽炎との三喩を擧ぐ。然るに今の疏は正く乾城を引證すと雖も、三程の喩皆無自性の義を成ずる故に、今も一具に引證し給ふ、即同文故來なり、乃至の字に響を乃至せり。聲聞經中等とは、慧影疏第二云く、聲聞經中但得生空、不得法空、不無陰體、猶在、不無成城因緣、乾闥婆城因緣并無是故不說、今日大乘生法并空、所以得明。文以城喩身の城は、土木積集の城なり。爲喩也迄は智度論略抄の文なり。

○此中言悉地宮有上中下、上謂密嚴佛國出過三界、非二乘所得見聞、中謂十方淨嚴、下謂諸天修羅宮等若行者成三品持明仙、時安住如是悉地宮中當以此喩觀察如海氣日光因緣邑居嚴麗層臺人物燦然可觀不應同彼愚夫妄生貪著求其實事以此因緣於種種勝妙五塵中淨心無所罣礙也。

前の面鏡の段は、正報の身分の住壽等に喩ふ。故に起五神通住壽長遠等と云ふ。今の段は所住の宮殿に譬ふ。故に前は正報、今乾城は依報にして其の觀を異にするなり。上中下は身に於ても亦然りと雖、其の相の顯はれやすきに約して所住に就て釋するなり。悉地に付て諸說一例ならず、疏第十五に依れば、佛果菩提を無上悉地とし、此の以前に略して五種の悉地ありとす。一信悉地、地前あつて此の教に依て修行する者は、決定して菩提を成すと信ず此れ地前の信行なり。二入地悉地、初地歡喜地に入るなり。三五通悉地、世間五通の境は、幻夢水月像の如くにして、執着すべからずと了知して、世間の五通仙の地を度す。四二乘悉地、二乘の境界を觀察するに、心に無著を得て涅槃に隨せず、爾時二乘の境界を度する事を得て第八地に至るなり。五第九地より菩提の行を修し

て、轉々勝進して如來位を成ずるなりと。無上悉地と此の五悉地と合して六種なり、因果の別知るべし。此の疏の意に依て、即身成佛義には法佛悉地と持明悉地と二種とす。法佛悉地は卽無上悉地、持明悉地は後の五にして、地前三劫の位より第十地に至る迄竪次第に轉ずる位に現前する所の海會の相なり。第十五卷の疏は一人轉進の位に約す。又三品の悉地は疏第十五、馬頭儀軌等の意に依れば、因位の期願に由て三品の別を辨ず。今疏の三品と大同なり。然るに今の三品の悉地は、行者因心所現の海會を以て本とすれば、因位にあり、於眞言門修菩提行深修觀察の十喩の觀たる故に、果位の法佛悉地を混ずべきものにあらず。觀門にありては實に然り、若敎門に就て悉地宮の法體を論ずれば、中下は論なし、上の密嚴佛國は是れ普門の悉地なりと雖、海會現前は分證の莊嚴にして、尙是れ因位の分齊なり。然るに其の悉地宮の法體全く所證果なり。故に菩提心論には、若歸本則是密嚴佛國と。又疏には若見加持身卽見本地法身と、故に法體に就て論ずれば法佛悉地に通ずることを得べきなり。若行者成三品持明仙等とは、持明者に惣別ありて、惣じては三品の行者皆持明仙と云ふ。何となれば普門の行者も亦法佛の明を持する故、持明仙と名くべきなり。高祖の法佛悉地は、果上の悉地なれば今の三品と關せず、今の三品は卽高祖の持明悉地なり。如海氣等とは、所現の境相は幻有を有とすることを明す。不應同の下は能現の心相を明す、卽空を本とす。上來は正く觀解の相を明す。以此因緣乃至所罣礙也とは、觀の得益を明す。此の因緣とは乾城の觀なり。

○經云、又次秘密主以響喩解了眞言聲如緣聲有響彼眞言者當如是解者。

第六響の喩を釋す、響とは音聲に應ずる谷の聲を云ふ、其の實空

無の法なり。

○釋論云、若深山峽谷中、若深絶澗中、若空大舍中、以語言聲相擊、故從聲有聲名爲響、無智人謂爲有實智者心念是聲無人作、但以聲轉故更有響聲誑人耳根、人欲語時亦咽口中有風名憂陀那、還入至臍響出時觸頂及斷齒脣舌咽胸七處而退是名語言、愚人不解而生三毒、智者了知心無所著、但隨諸法實相。

智度論第六の文なり。山のケヅリたるが如きなるに、水をサシハサムを峽と云ふ。深絶とはフカクハルカなるを云ふ。澗は山に水をサシハサムを云ふ。空大舍は人の住する事なき大なる空屋を云ふ。語言聲相擊とは、論の正文には若語聲若打聲と云ふ、卽有情の聲と非情の聲との二聲なり、此の二聲の響なり。還入至臍とは、息風外に出でゝ外風と相擊て、還て内に入て臍輪を打て響を發す。此の響七處に觸れて外に出づるを語言と云ふなり。退とは内より外に退き去る義にして、退とは卽外に出づるの義なり。愚人不解とは聲は七處の因緣より生じて無自性なることを解せざる故に、聲に執著して三毒を生ずるなり。又諸法實相とは卽空理なり。

○眞言行者若於瑜伽中聞種種八風違順之音或諸聖者以無量法音現前敎授或由舌根淨故能以一音遍滿世界遇此諸境界時亦當以響喩觀此但從三密衆緣而有是事非生非滅非有非無是故於中不應妄生戲論爾時自入音聲慧法門也。

八風違順の音とは、利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂の八なり。此の八能く人心を動搖する故に風と云ふ。此の中利・譽・稱・樂は順境なり、衰・毀・譏・苦は違境なり、故に違順と云ふ。此の八聲は共過失なる故に、聖者の法音と行者舌根淨とにあらざる餘、愛すべきと惡むべきとの聲なり。賢首起信論義記下末の意に依れば、財榮已を潤ふすを利と

云ひ、損耗侵陵を衰と云ひ、過を越えてソシルを毀と云ひ、德を越えて歎ずるを擧と云ひ、實德を讃するを稱と云ひ、實過に依て謗するを譏を云ひ、逼迫して形を侵かすを苦と名け、心神悅樂を樂と名くるなり。或由舌根淨とは、行者の自舌なり。八風は魔境、聖者の法音は聖境なり。音聲慧法門とは、元語は諸法無行經の下卷に出でたり。今は隨宜轉用なり。常途顯敎に約せば、音聲の無自性を了知して、空理を證するを音聲慧法門と名く。若密敎に約すれば、聲字即空實相の道理を認知して、聲に卽して自心の曼荼を開顯するを音聲慧法門と云ふなり。

○經云、復次秘密主如因月出故照於淨水而現月影像如是眞言水月喩彼持明者當如是說者。

自下第七に水月の喩を釋す。經文中に、眞言水月喩とは、古來異說ありと雖、指心鈔の私云の如く、眞言水月の喩もと訓ずべし。本尊と行者とを以て且く喩と云ふなり。喩に從ふと雖、實は法なり。又玉振の意は、世の水月を以て海會の現前に喩へ、海會の水月を以て心月に喩ふ、故に今眞言水月の喩とは海會の相を云ふと。云云

○釋論云、月在虛空、中行而影、現於水、實法性、月輪在、如如法性實際虛空、中而凡夫心水有我我所、相現又如少兒見水中月、歡喜欲取大人見之則笑無智者亦爾、身見故見有吾我無實智故見種種法見已歡喜欲取諸相得道聖人笑之也復次譬靜水中見月影擾水則不見無明心靜水中見吾我憍慢諸結使影實智慧杖擾心水則不見以是故說諸菩薩知法如水中月。

作釋の中、此れは卽智度論第六の略抄の文なり。實法性月輪とは、法性法身を月輪に喩ふ、卽能住の佛身なり。如如法性實際虛空中とは、所依所住の法性土なり、之を以て虛空に喩ふ、此の身土は共に法性にして其の體別なしと雖、人と法とに屬するを以て、且く

身土の異を辨ずるなり。而凡夫心水有我我所相現とは、凡夫心には無明煩惱相應する故に之れが爲に迷はされて當情現の我我所の相現ずることあるなり。然るに其の本質たる法性眞如の月は本來清淨なるに、其所現の相は何としてか我我所の相なるや。若法性眞如の月が本質と爲つて我相を現ずと云はゞ、本質影像相違するにあらずやと云ふ。釋摩訶衍論第四云く、根本無明不能自有當依眞如方得止住と。慈行抄第三に釋して云く、妄元無性故依地成と。天台玄義一之二云く、無明無體全依諸性、是故水本質の眞如實相の月は本性清淨なれとも、無明附隨する故に其影像に我我所の相現ずるなり。無明心靜水とは、無明煩惱相應の心水法性の眞理にクラク暗鈍無智なるを靜水と云ふ。

○持明行者亦如是、由三密方便自心澄淨故諸佛、密嚴海會悉於中現或自以如意珠身於一切衆生心水中現爾時應諦想觀之

今此、密嚴之相、從我淨心生耶從佛淨心生耶自他實相尚自畢竟不生何況相違因緣而有所生、又如一切江河井池大小諸器月亦不來水亦不去而淨月能以一輪普入衆水之中我今亦復如是衆生心亦不來自心亦復不去而見聞蒙益皆實不虛故當以慧杖攪之便知無實不得如彼嬰童欲作方便取之以爲玩好之具也、既能自靜其意復當如如不動爲人演說之故曰持明者當如是說。

上來は智度論を引證して、經の如因月乃至月影像の文を釋し畢る。自下は如是眞言水月喩の經文を釋す、中に於て由三密乃至於中現は自證に約して釋し、或自以如等とは化他に約して釋す。自證は本尊が行者の心中に現ずるに約す、化他は行者普現色身三昧に住して、衆生の心中に現ずるに約す。如意珠身とは、行者三密の加持に由て、三業の清淨なる故に不思議の業用ありて、無思無

爲にして利衆生の事を作すと、如意珠の幢頭に在て一切能く一切人の希願を滿つるが如くなる故に如意珠身と云ふ。如意珠即身にして持業釋なり。又如意珠を菩提心に喩ふ。經の第七云く、淨菩提心の如意寶滿世出世勝希願と、此の菩提心所生の身を如意珠身と云ふと釋すれば依主釋也。然るに初說を可とす。爾時應諦等とは、今此の密嚴之相以下に、自他共無因の四句あり、生佛自他なる故に自よりも生ぜず、他よりも生ぜず、相違の自他なる故に、共しても生ぜず、相違の自他なる故に、俱に因緣にあらず。然れども無因よりも生ぜざるを以て四句を含めり。自他實相等とは自他の眞如理性の平等の實相すら尙畢竟不生なり、況や迷悟差別の相違の自他の因緣寧所生あらんやとなり。又如一切の下、初に珠身心現を明すに、譬說と合法とあり。然るに衆生心の不來を變じて水の不去に合し、自心不去を變じて月の不來に合す、來去相

反すると雖、義理に全く違ひなきなり。惣結の中、既能自靜其意は初釋結す。自心澄淨にして海會現ずるが故に。後當の下、或釋を結す。如意珠身の故に如々不動と云ふ。衆生益を蒙る故に爲人演說と云ふなり。

○經云復次秘密主如天降雨生泡彼眞言悉地種種變化當知亦爾者。

自下第八泡の喩を釋す。天降雨生泡とは、雨水降て海水を擊て浮泡を生ず、雨水は因なり海水は緣なり、因緣和合して泡を生ずと雖、水を離れて泡なく泡の外に水なく、水を全ふして泡となり泡を全ふして其のまゝ水なり、故に能生所生一味平等にして差別卽無差別なり。海會現前の相の種々變化も亦之に同じ。行者の自心を因とし佛の大悲を緣として、海會現前の相ありと雖、因是法界、緣是法界、因緣所生の法も亦是れ法界にして、能所生一味平等

にして、六大法界を出でず、自心を離れざるに喩ふるなり。

○聲聞經以受譬浮泡般若中以泡爲喩、雖無實性而因緣猶是實法、故十句中有如化而不明泡喩。

聲聞經以受譬浮泡とは、次に釋する如く、泡は實性なしと雖、之れが因緣たる雨水の因と地水の緣とは、俱に水大なる故實法なり、故に析法空の人空(泡)法有(水)を顯す喩なり。故に聲聞經に五喩を說く中に泡を生ぜり。般若中以泡爲喩とは、般若は三乘共學の敎門なれば、亦泡の喩を用ゆる也。然れども大乘の體法空を明す、十句卽十喩の中には、變化を出して之を出さずとなり。故に般若には說と不說と必ずしも一定せざるなり。大品般若第二十二、六度相攝品に聚沫浮泡芭蕉陽炎幻の五喩を說く事、聲聞經に同じ。智度論第八十一廣く釋す。十句中とは大品般若の序品所說の幻と炎と水月と虛空と響と乾城と夢と影と鏡像と化との十喩にして、智度論第六に之れを釋せり。

○今此經譬意復殊也、如夏時雨水自雨水中隨滯之大小生種種浮泡形類各異、然水性一味自爲因緣、四句推求無別、所生之法、是故此泡擧體從緣泡起卽是水起泡滅卽是水滅故以此喩卽心之變化也、如行者卽以自心作佛還蒙心佛示悟、方便轉入無量法門、又以心爲曼荼羅、此境與心爲緣能作種種不思議變化、是故行者以浮泡喩觀之了知不離自心、故不生著也。

今卽心と云ふと雖、第二劫の卽心幻の第六住心にありては、事第八賴耶を心として、心外の影像を卽心幻と云ひ、第七住心の佛性眞識の眞如實相を心として、心外の影像を卽心幻とするが如きと同じからず、泡も例するに亦爾也、卽不思議泡を取るを以て意復殊と云ふ。今卽心と云ふと雖、卽不二心にして六大法界の故に、因も法界、緣も法界、所生の果も法界に非ざるなし。故に泡の生滅

は水の生滅にして生と云ひ滅と云ふ法界ならざるなし。不思議幻は顯の一家も同じけれとも、金剛幻の稱は獨り我が宗にあり、泡も亦然り。泡起卽是水起とは、卽法界が家の生滅なるを以て常生常滅也、故に不思議の泡と名け、金剛泡と稱すべし。卽事而眞の道理は此處にあり。喩卽心之變化也とは、變化と浮泡と其の喩は異なりと雖、卽心の化卽水の泡、其意全く同き故に次に下出す。智度論の變化に合して泡を釋する也。般若に十句の中に泡を捨つるは、泡は析法空に近き故なり、而して變化を取るは體法空に近きが故なり。是の故に般若には取捨を存すれども、今此の中に泡と變化と並取る事は、我宗は體法空にあらず析法空にあらず、卽心の泡卽心の變化、擧體如如不思議にして六大法界なる故に、並て俱に之れを取るなり。又依心爲漫荼羅等とは、此の釋と前如行者等の釋との異を辨ずれば、前釋は行者の自心佛と作て（海會現前）還て彼佛の開悟の方便を蒙て、自心が無量の法門に轉入するなり、故に自利なり。今此の釋は自心能く曼荼羅（海會現前）の境界を造作して、之を以て所緣の境界、卽所緣緣として普現色身三昧に住し、自心能く種々の不思議神變を現作して、廣く衆生を濟度す。故に此の釋は利他なり、此れを以て海水（自心）昇空雨水となり（作佛）降て海水の爲に緣と成て種々の浮泡を生ずる（轉入法門と能作變化）に喩ふるなり。

○釋論又云修定者有十四變化、天龍鬼神亦能作化、如化生先無定物、但以心生便有心滅則滅是法無初中後生是無所從來滅亦無所至、當知諸法亦如是、復次如變化、相清淨如虛空、無所染着、不爲罪福所汚、諸法亦爾、法性如如實際、自然當淨譬如閻浮提四大河一一河有五百小河以爲眷屬、此水種種不淨入大海、中皆悉清淨、與泡喩意同也。

自下は論の變化の喩を引て今經の泡に同ずるの釋なり。修定者とは、色界の四禪定を修する者を云ふ。十四變化とは、智度論第六に出でたり。能變化心に十四あり、初禪に二の化心あり。一欲界の攝、謂く初禪にして欲界の化を作すなり。二初禪攝、謂初禪にして初禪の化を作すなり。二禪に三あり、欲界と初禪と二禪と三禪に四あり、欲界と初禪と二禪と三禪と四禪に五の化身あり、前の四と第四禪の化となり。此の能變化の心は、必ず自地及上地に依る、下に依ることなし。何となれば下地の心は勢力微力にして上地の境を變化すること能はざる故なり。又此の能變化心は、神境通より生ずる故に通之果なり。此の變化身は理の化事を作す。一能作小乃至微塵、二能大乃至滿虛空、三能作輕乃至鴻毛、四能作自在能以大爲小以長爲短等種々、五能有主力大力有て人の能く下すところにあらざる故に、六能遠到、七能動地、八隨意所欲盡能得一身作多身多身作一身石壁通過履水踏空手捫日月能轉四大地作水水作地火作風風作火石作金金作石と。取意又身欲界に在て化するに四あり。欲界の自身に似たる化と、他身に似たる化と、色の自身に似たる化と、他身に似たる化となり、身色界に在て化するも亦然かなり。故に今化と云ふは、但し所化の事なり。能化の心を取て喩とするにあらず。何となれば能化の心は實法なる故に十四變化は修得なり。天龍鬼身亦能作化とは生得なり。俱舍論第二十七云く、神境智類惣有五種、一修得、二生得、三呪成、四藥成、五業成修得は定を修して得る、生得は彼處に生ずれば之を得るなり、餘は知るべし。諸法亦如是とは、蘊界入の三科の諸法を云ふなり。諸法亦爾とは、即三科の諸法を云ふ。變化の事は種々の相ありと雖其の實は初中後なく去來なく、虛空の清淨なるが如し、三科の諸法も亦爾なり。相に約すれば蘊界處等の種々の異ありと雖、其の

擧體如々常住にして清淨なりと。譬如闍浮等とは、中印度境雪山の北、香山の南に無熱地あり、縱廣五千由旬の池なり、其の池の東の銀牛口より殑伽河を出す、南の金象口より信度河を出す、西瑠璃の馬口より縛芻河を出す、北の頗胝の師子口より徒多河を出す、此れを四大河と云ふ。四大河及五百小河は諸法差別の相に喩ふ。大海を以て如如實際に喩ふるなり。以上は智度論第六の略抄の文なり。與泡喩意同也は疏主の詞なり。

○經云復次秘密主如空中無衆生無壽命彼作者不可得以心迷亂故而生如是種種妄見者。

如空中とは、上の經の惣列の文に虛空花と云ふ、故に如空中とは卽空花を云ふ也。具には如空中見花と云ふべし、故に空中の如しと讀むべし、無衆生以下は法說なり。

○釋論云如虛空者謂但有名而無實法虛空非可見法遠視故眼光轉見縹色諸法亦如是空無所有人遠無漏實智慧故棄實相見彼我男女屋舍城郭等種種雜物心著如少兒仰視青天謂有實色有人飛上極遠而無所見又如虛空性常清淨人謂陰曀爲不淨。

諸法亦如是、性常清淨姪欲瞋恚等曀故人謂不淨。

釋論第六の文なり。論の虛空は轉見縹色と云ふ故に、新譯の空一顯色なり。縹色とは青白色なり。空中に妙高山の四邊の色、映じて空中に各一の顯色を現ずるを空一顯色と云ふなり、故に論は空花にあらず。然るに之を引て經の空花を釋するは意あり、謂く經と論と喩同じからずと雖、義類異にあらざれば、合して釋するは復巧妙なりとす。上の泡と化との如し。又復冥に大品般若の十喩には、虛空を說き、大般若經第一緣起品には十喩に空花を說くに叶へりと云ふべし、陰はクモル、曀はクラカルなり。

○此經云心迷亂者如人以疾病非人等種種因緣其心迷亂安見淨虛空中有種種人物形相或可怖畏或可貪著若得本心時則知此事生時不染虛空滅時亦非還淨本來不碍虛空亦不異於空行者修觀行時若有種種魔事種種業煩惱境皆當安心此喩如淨虛空雖於無量劫中處於地獄爾時意無罣碍如得神通者於空一顯色中自在飛行不爲人法妄想之所塵汚也。

自下は經文を解釋す、疾病は翳膜に由て心狂ふ非人は魑魅邪鬼なり、等の字は其他種々の心を狂せしむる因緣を等取す。行者修觀行等とは、種々魔並業煩惱を以て、譬中の疾病非人等の因緣に合す。事と境とを以て種々人物形相等に合す、事は魔所作の事業、境は業煩惱より起す所の境界なり。皆當安心此喩等を以て若得本心等の句に合するなり。雖於無量劫中處於地獄とは、十喩觀成就して初地を得る人攝化衆生の爲に地獄に處するを云ふなり。

卽大悲代受苦なり。

○經云復次秘密主譬如火燼若人執持在手而以旋轉空中有輪像生者如人持火燼空中旋轉作種種相或方或圓三角半月大小長短隨意所爲愚少觀之以爲實事而生念著然實都無法生但手中速疾力能運一火成無量相耳眞言行者若於瑜伽中隨心所運無不成就乃至於一阿字門旋轉無碍成無量法門爾時當造斯觀但由淨菩提心一體速疾力巧用使然不應於中作種種見計爲勝妙而生戲論也

自下第十旋火輪の喩を釋す。經文の火燼の燼はモヘクイと訓ずべし。智論第二云く、被火燵頭名作火槽。眞言行者の下の乃至は、無不成就の悉地に無量ある故に乃至と云ふなり。諸字門の成就なり。於一阿字門等とは、中に於て阿字門を觀じて得る所の悉地を出す。梵文は一字に千里を含む故に、旋轉無碍にして無量の法門

を成ずるなり。一體速疾力とは、疏第六の意に依れば、一切如來皆同一法界の智體なりと證知するを一體と云ふ。此の一念中に於て能く次第に無量世界海微塵等の諸三昧門に通達して、一切衆生の得分の因緣進趣方便の差別等を知るを速疾力と云ふ。此の三味は、佛菩薩の所入に通ず。中に於て、此の段は菩薩所入の觀なるべし。而して淨菩提心を以て體とす、已成未成の一切如來同一體性と證知する故に自ら速疾力あり、卽阿字觀なり。

○釋論無火輪、喩別有影喩云、如影可見而不可捉諸法亦如是、眼情等見聞覺知實不可得又如影映光則現不映則無諸結使煩惱遮正見光則有我相法相又如影人去則去人動則動人住則住善惡業影亦如是、後世去時亦去、今如世住時亦住報不斷故罪福熟則出然是影非有物、但是誑眼法如旋火槽疾轉成輪亦非實有喩意大同也

智論第六の略抄なり。云如影等とは智論の文三段ありて喩合分明なり。又如影映光とは、映は說文に明とも隱ともあり。今は隱の義を取る、人ありて日月の光遮ぎる時、影の生ずるが如し、遮正見光と云ふ、以て知るべし。又如影人等とは、善惡の業を人に喩へ果報を影に喩ふる故に善惡業影とは業之所感の果を影に喩ふるを以て依主釋なり。後世去とは、業力既に盡きて、後世に去る時は果報も亦隨て去り、業力未だ盡きずして今世に住する時は、果報も亦隨て住する也。何となれば果報は世世相續して斷ぜざるを以てなり。善惡の業熟する時、果報は出生するなり。然是影非等とは疏主の詞なり。

○秘密主應如是了知大乘句心句無等等句必定句正等覺句漸次大乘生句者、梵音謂句爲鉢曇義如前釋此十喩皆是摩訶衍人甚深緣起非聲聞緣覺安定處名大乘句心之實性更無一法

可以顯示之者亦不可授人但如是深觀察時障蓋雲披自當證知耳故名心句如來智慧於一切法中無可譬類亦無過上故名無等心之實相與之凾蓋相稱間無異際故曰無等等若以十緣生了知心處則安住其中故曰無等等句諸佛以此十緣生義必定師子吼說如來性心實相印若有能信解者假使十方世界一切諸魔皆化身作佛說相似般若亦不能變易其心使法相不如是故曰必定句以此中道正觀離有爲無爲界極無自性心生即是心佛顯現故曰正等覺句以深修觀察故如入大海漸次轉深乃至毘盧遮那以上上智觀方能盡其源底故曰漸次大乘生句當知如是六句次第相釋次第相生也。

自下は行を歎じて修を勸む。作釋の中に於て初に初の六句を釋し、二に毘盧遮那の下、當得具足以下の句を釋す。經に如是とは上來所說の十喩を指す、梵音謂句以下は作釋なり。義如前釋とは、序文の端相土の三身說法の眞言道淸淨句法の釋段を指す、句は足跡の義にして、卽安足の處なり、又句は所依の義、眞言行者此の十喩を所依として修行すべき故に。甚深緣起とは、此の十喩は眞言行者淨菩提心觀の助觀にして、密人の所修に局る故に、甚深緣起は阿字本不生際の緣起にして、因是法界、緣是法界、因緣所生の法も亦是れ法界なる故に甚深と云ふなり。眞言大乘の人の所感安足處なる故に大乘句と云ふ。故名心句とは、淨菩提心を修顯する所依の觀なる故に心句と云ふ、心之句なり。蓋障雲披は初地の入心除蓋障三昧の故に、遮情の極る處淨菩提心自ら證知す。然れども尙初地の位にありて佛果の位にあらず。如來智惠は卽第十一地佛果の位にして能等の出纏の心なり。心之實相は如來智慧が所等の在纏の本覺なり。還同本覺を凾蓋相稱無異と云ふ。理智は元來不二一相なり若以十緣生等とは、十緣の觀門なり。了知心處

とは、釋摩訶衍論第四に云く、率萬行到果位時、始覺般若分明顯了本有功德具足圓滿現見一切法界之心安立住處根本無明頓斷無餘是故名爲見一處と、卽第十一地佛果圓滿して不二法界に安住するを了知心處と云ふ。以下に毘盧遮那以上智觀方能盡其深底と云ふ是れなり。十喩は無碍等の心處に安住するの所依なる故に句と云ふ。必定師子吼に二の決定あり。初は佛の說法は如來性心實相印を見て師子吼し給ふ。後は若有信解の下、唯佛のみ此の實相印を說て師子吼し給ふに、聽者信解して決定不退なるなり。是故に自說決定と說益決定とを以て二の差別とするなり。如來性心實相印とは、阿字諸法本不生の眞淨の菩提心を云ふなり。魔說は指心鈔に演密抄を引く見るべし。以此中道正觀等とは、離有爲無爲界は第八住心にして、初地入心の未極なり、極無自性心生は入心の已極第九の住心なり、心佛顯現は第十住心なり。此段三心合說す。然るに前の證知心句は初地なり、今も初地ならば、重繁なるにあらずやと云ふに、上には自當證知と云ふ、故に自證に約することと分明なり。此の段は化他に約して如來の師子吼能信解の衆生をして、此の十喩中道の正觀を以て心佛を顯現せしむ、卽心佛顯現之句なり。前の使法相の使字、語勢を尙此の句に流して見るべし。自利利他の句相辨別し、次第相生水の流れるが如く也。正等覺は心佛顯現なり。以深修觀察乃至次第相生也とは、上の疏に於て正釋復次の兩釋ありて、正釋は地前より初地に至る迄を以て深修觀察を釋し、復次釋は初地より十一地に至る迄を以て之を釋す。今の段は寬く地前地上に通じて釋す。卽上の正復の兩釋を合して得るなり。地前三劫の間の曼荼羅行も、果地の法門を以て所修の行體とす、深修觀察にあらずして何そや、タトヘ初無畏も深修の第一步なり、乃至の言、豈に地前を簡ばんや。然るに指

心鈔二義を出して簡で地上に局る義を取るは不可なり。今は後義に依る。初の大乘句は横竪不二にして阿字本有菩提心なり、即眞言行者の所安足處なり、今漸次大乘生句は勝上大乘句の心續生の深修觀察にして、之を以て終の句として行者を勸勵す、故に地前の深修を除くべからず。大乘とは淨菩提心なり。上上智觀は其本據北本涅槃第二十七、中論疏に出でたり。今は第十一地佛果なり。當知如是等とは、前々が後を生ずるを次第相生と云ひ、後々が前を釋するを次第相釋と云ふ、初句は大人の所安足なる故に以て能住の地前の最初發心と初地發心とを顯す、卽因の句なり。第二は地前三句の究竟、第三は地上最極の究竟、第四は別して最極究竟の說法と說益とを明し、第五は化他に就て巧に果となり（地前に對す）因となる（地上に對す）初地を擧げて、以て地前地上の三句の益を顯はす、第六は具に心續生の相を明して、以て行者の漸次に轉深ならんことを勸む。十喩の觀は卽根の句にして修行の句を答ふ、是れ進行の義なれば別に根を云はざるなり、今は唯密教に約して行者を勸むるなり。又次第相釋せば甚深大乘を了知する故に、自ら心實性を證知する事を得、心の實性を了知する故に、理智一際なる事を得、理智不二を了知する故に必定師子吼して、心の實相印を說く、如來性を了知する故に初地の正等覺を成ず、正等覺を了知する故に漸次轉深にして、毗盧遮那上上智觀を發す也。又般若寺鈔上云く、問十緣生句了次經文出六句、其意何、答此六句歎緣生不思議也と。又云く向以此六句歎彼十緣生何、答、此十喩皆是大乘甚深緣起、非二乘安立故云大乘句、心之實際不可得無能無所、如是觀時、心性空寂故名心句、如來智惠亦不可得無敢可比者、故云無等々句也、諸佛以此十緣生義、決定師子吼並能信解決定至無上果、故云決定句、能知此十喩義、極無垢心生此心生時卽得

佛果一德、故云正等覺句、如是十喩、令行者心漸從淺至深、淺者自餘九宗、深者今此秘密莊嚴住心、從彼唯蘊無我至此第十住心令心彌淨彌固、遂住無垢淨菩提心言也と。

○毘盧遮那卽以此十緣生句不思議法界作無盡莊嚴藏、從十世界微塵數諸法界門常出生根力覺道禪定解脫諸寶遍施衆生猶尙不匱故曰具足法財、一切如來智業由此具足故曰出生種種工巧大智慧、若於一念心中明見十緣生義、則上窮無盡法界下極無盡衆生界、其中一切心相皆能了了覺知、以皆從緣起卽空卽假卽中故、故曰如實遍知一切心相、阿闍梨言、行者初修觀行境界現前時、由內因外緣力、故自然有緣起智生、不同常途習定功力若至而後通徹也。

自下は經の當得具足法財出生種々工巧大智如實遍知一切心相の句を釋す。毗盧遮那は能說能勸の敎主なり。此十緣生句は、正く勸修する所の法門財體なり、阿字の有空不生の三諦卽一は卽是れ十喩の妙體なり、有卽空々卽有にして、有空を動せずして卽本不生相卽相入無障無碍なるを不思議法界と云ふ、是れ則法財の相なり。無盡莊嚴は身口意三密の無盡藏なるを以て、三密の用卽法財の用なり。是の如くの體相用の三大卽法財なり、之れより更に無邊の根力覺道等を出生するを亦法財と名く、無邊の根力覺道等の法財を內に包含し、外に出生すれば藏と稱す、能く此の如くの根力等を出生して、一切衆生の本有の淨菩提心を莊嚴して窮盡ある事なきを以て、無盡莊嚴藏と云ふ也。從十世界等とは、門の字を以て藏の義を轉釋す、藏の口を門と云ふ。十世界とは、十は無盡の義を顯はす、今は別して五大五智なるべし。密敎は五大五智を以て一切法を盡す、故に一切如來智業とは、自利利他の業を云ひ、工巧大智慧とは權實二智を云ふ也、若於一念心中等以下は、

權實二智の用に約して、以て如實遍知一切心相を釋す。上窮は實智の妙用、無盡法界は卽阿字本不生際、下極は權智の巧辨なり。密宗の二智は別體なしと雖、所望に隨て妙用に上下の異あるなり。以皆從緣起とは、從緣所生は佛敎の大宗なれども、因緣生の法の中に於て、空假中の三諦次第に現ずるは三論宗の所明、圓融の三諦は兩一乘の宗義、表德の實相に於て阿字の三義、佛・金・蓮・の三部なるは密敎の法門なり。空假中の言は同なれども其實天殊地別なり混ずる事勿れ。不同常途習定等とは、常途の顯敎は定に由て智を生じ、智に由て惑を斷じ斷惑に由るが故に眞如實際漸く顯はる、此れ三大僧祇滿せざれば正覺を成ずる事能はざる所以なり。眞言密敎は爾らず、法界の實德を以て直に以て所修の法門とす、卽此の十喩なり。初心の行者も亦能く觀行す、必ずしも第三劫に至て方に能く之を觀ずと云ふにあらず。行者所修の因も是法界、本尊が彼の緣も亦是法界、因緣和合して現前する所の海會の相も、亦復法界なるを以て、不轉肉身一生成佛する所以也。此を不同と云ふ。若至は三大僧祇勤苦辛勞十進九退を云ふなり。緣起智生とは海會現前の相を觀じて、緣生無自性を觀ずる智の生ずるを云ふ。又阿字本不生の中道を觀ずる智也。

○梵本中云自此此後次說眞言者持誦次第如法悉地如法果生、此是傳法者所譯故不於經中具出其大意言已說淨菩提心諸心想竟從此以下明進修方便及悉地果生也。

上來十喩の觀門を說く經文を釋し畢て、自下梵本の具闕を辨ず。中に於て二あり、初に梵本の具さなること明かす。持誦次第とは、次に云ふ進趣の方便にして、具緣品以下に廣說する修行曼荼羅行なり。如法悉地とは、海會現前の持明悉地にして因なり。如法果生とは、法佛悉地にして第十一地佛果なり。後に此是傳法の下、略